

(単著・共著・編著・訳書など、表紙に名前が載っているもの)
(分担執筆だけのものは略)

このページの目次

- 52. 臨床ストレス心理学
- 51. イギリスこころの臨床ツアー：大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く
- 45～50. エビデンス・ベイスト心理療法シリーズ（全9巻）
- 50. 統合失調症
- 49. アルコール使用障害
- 48. 児童虐待
- 47. 双極性感情障害
- 46. 社交不安障害
- 45. 摂食障害
- 44. 強迫性障害への認知行動療法：講義とワークショップで身につけるアートとサイエンス
- 43. 統合失調症を理解し支援するための認知行動療法
- 42. アメリカこころの臨床ツアー：アメリカ精神医学・心理学臨床施設の紹介
- 41. 発達障害の臨床心理学
- 40. 認知行動療法 100 のポイント
- 39. 臨床と性格の心理学
- 38. 医療心理学を学ぶ人のために
- 37. 心理学の謎を解くー初めての心理学講義ー
- 36. ロンドン こころの臨床ツアー
- 35. 対人恐怖とPTSDへの認知行動療法：ワークショップで身につける治療技法
- 34. 臨床認知心理学
- 33. ワークショップから学ぶ認知行動療法の最前線 うつ病、パーソナリティ障害、不安障害、自閉症への対応
- 32. ワークショップから学ぶ認知行動療法の最前線 PTSD、強迫性障害、統合失調症、妄想への対応

31. 認知療法・認知行動療法事例ワークショップ（1）
30. パーソナリティと臨床の心理学：次元モデルによる統合
29. 臨床社会心理学
28. 統合失調症：基礎から臨床への架け橋
27. 侵入思考：雑念はどのように病理へと発展するのか
26. 不安障害の臨床心理学
25. 妄想はどのようにして立ちあがるか
24. 認知行動アプローチと臨床心理学：イギリスに学んだこと
23. 高校生の新現代社会ー共に生きる社会をめざしてー初訂版
22. 16歳からの東大冒険講座 [3] 文学／脳と心／数理
21. 抑うつうつの臨床心理学
20. 臨床心理学研究法
19. 認知行動療法の臨床ワークショップ2ーアーサー & クリスティン・ネズとガレティの面接技法
18. 認知行動療法の臨床ワークショップーサルコフスキスとバーチウッドの面接技法
17. 統合失調症の臨床心理学
16. 性格の心理：ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ
15. 心理臨床の認知心理学：感情障害の認知モデル
14. 臨床社会心理学の進歩 実りあるインターフェイスをめざして
- 8～13 講座臨床心理学（全6巻）
13. 第1巻 臨床心理学とは何か
12. 第2巻 臨床心理学研究
11. 第3巻 異常心理学Ⅰ
10. 第4巻 異常心理学Ⅱ
9. 第5巻 発達臨床心理学
8. 第6巻 社会臨床心理学
7. エビデンス臨床心理学ー認知行動理論の最前線
6. 自分のところからよむ臨床心理学入門
5. はじめて出会う心理学
4. 認知行動アプローチー臨床心理学のニューウェーブ
3. 認知臨床心理学入門 認知行動アプローチの実践的理解のために

2. 知の技法－東京大学教養学部「基礎演習」テキスト
1. 自己形成の心理学－青年期のアイデンティティとその障害－

52. 臨床ストレス心理学

津田彰・大矢幸広・丹野義彦（編） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第7巻

東京大学出版会 2013

内容紹介

ストレスが心身の健康に影響をあたえるメカニズムが明らかになってきた。ライフコースの各場面や、医療・教育・福祉・災害の現場などで問題となるストレスへの心理的支援、そしてコーピングのありかたを実証的に概説し、実践に役立てる。

目次

はじめに 臨床ストレス心理学の誕生（津田 彰・大矢幸弘・丹野義彦）

第1部 ストレス研究の基礎と臨床

第1章 発達の視点からみたストレス研究の基礎と臨床（河合優年・佐藤安子）

第2章 医学的視点からみたストレス研究の基礎と臨床（熊野宏昭）

第3章 医療、教育、地域の連携とストレス心理学（大矢幸弘・山下裕史朗）

第2部 臨床ストレス心理学の展開領域

第4章 妊娠・出産と育児への心理社会的支援（津田茂子）

第5章 学童・思春期における心理教育的支援（ジャニス・プロチャスカほか）

[トピックス] 応用行動分析を活用した問題行動の改善（小野 学）

第6章 高齢者のストレスと適応（稲谷ふみ枝）

第7章 生活習慣病への臨床心理学的支援——習慣改善のための行動療法（足達淑子）

[トピックス] 不眠症の認知行動療法（大矢幸弘）

第8章 がん患者への心理社会的援助（安藤満代）

第9章 身体的アプローチによるストレスマネジメント（百武正嗣）

[トピックス] コミュニティー健康教育とリラクゼーション技法（百武正嗣）

第10章 災害被災者・犯罪被害者の心理社会的問題と治療・ケア（古賀章子・前田正治）

アマゾンへのリンク



はじめに より

ストレスが精神的な病気の発症と経過に関連していることは広く知られている。ストレスの研究は歴史的に見ても、Freud (1936) の心的外傷論や強制収容所の精神病理的研究などから明らかのように、臨床心理学において主要な学問的テーマであった。

近年、ストレスはまた、身体的な病気（例えば、がんや糖尿病などの生活習慣病、喘息やアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患）とそれに関連するライフスタイルなどの心理行動（セルフケア、健康信念などの認知と思考を含む）にも深くかかわっていることが明らかになっている（河野・石川，2005）。さらに、災害やテロ、事故、犯罪、虐待などに遭遇したり目撃したりするといった突発的な重大事件による外傷後ストレス障害（post-traumatic stress disorder, PTSD）が多発するようになり、ストレス障害の様相は

多様化している (Fink, 2007)。

ストレスに由来する臨床心理学的な問題は学問的なテーマとして(津田・岡村, 2006)、また社会的に解決が求められる実際的な問題として(Prochaska & Prochaska, 2005; 小杉, 2006)、ますます重要になっている。これら拡大するニーズに応え、実践性と実証性の統合化を担った学問としての説明責任を果たすために、臨床心理学に課せられた期待は大きい。欧米の臨床心理学は、医学の領域で起こったエビデンス・ベースト・メディスン

(Evidence-based Medicine, EBM) の影響を受けて、心理療法や心理教育的介入に関する正しい情報と技法を選別し、それらの知見をデータベース化し、それを必要とする多くの人達がそれらを活用できるシステムづくりに取り組んでいる (Norcross et al., 2005)。すなわち、実証に基づく臨床心理学の展開である。

わが国の臨床心理学には残念ながら、丹野 (2001) が指摘するように、このような行動科学的なサイエンスとしての考え方はまだほとんど浸透していない。エキスパートの経験や直感に依存した意見によって、また徒弟的な心理療法の研修を通じて学んだ技法によって、アートの側面を強調する心理療法が主流のように思われる。

そこで本章では、実証に基づく臨床心理学の理念に従い、とくに医療保健におけるストレス問題への心理療法、心理教育、ストレスマネジメント実践の実証性を念頭においた「臨床ストレス心理学」 (Clinical Stress Psychology) をわが国に普及させるため、その考え方や概念的枠組みを提示する。「臨床ストレス心理学」という切り口から、世界におけるストレス研究やストレス障害の治療のレベルをふまえて、わが国の臨床心理学の治療や研究の最前線を紹介し、今日的な里程標を示すことは重要と考える。

51. イギリスこころの臨床ツアー：大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く

丹野義彦 星和書店 2012

内容紹介

本書は、イギリスの10都市の大学めぐり・病院めぐりの旅行ガイドブックです。

オクスフォードやケンブリッジ、マンチェスターなどの10大都市をとりあげて、大学キャンパスを散歩し、臨床心理学や精神医学の臨床施設の歩き方を解説しています。実際に足で稼いだ情報満載。従来のガイドブックとは一味違うイギリスの顔が見えてくるでしょう。イギリスの医学や心理学の実態、歴史などの入門書としても楽しめる一冊です。

[→本ホームページでの紹介リンク](#)

[→アマゾン・コムの本書へのリンク](#)

[→星和書店の本書へのリンク](#)

このホームページでは、本書で紹介した写真のカラー原版を公開し、インターネットのリンクを張っています。本書を読まれる際には、ぜひこのリンクもご活用ください。

→〈写真原版とホームページへのリンク〉

目次

1.オクスフォード

イギリスの大学入門：一度は行ってみたい大学都市

2.ケンブリッジ

世界で最も美しい大学を堪能する

3.ロンドン

ロンドン大学のとっておきの名所

4.ブライトン

高級リゾート地の中のアカデミックな空間

5.カンタベリー

世界遺産に病院と学校の起源をさぐる

6.ノッティンガム

産業革命の都市で大学と学校を巡る

7.マンチェスター

産業革命の光と陰をたどるマンチェスター大学散歩

8.カーディフ

世界でも珍しい「行政大学一体型」キャンパス

9.グラスゴー

地下鉄で回る文化都市こころの臨床ツアー

10.ベルファスト

タイタニック号が象徴する北アイルランドの二面性を見る

45～50. エビデンス・ベースト心理療法シリーズ (全9巻)

貝谷久宣・久保木富房・丹野義彦 (監修) 金剛出版. 2011～2014

50. 統合失調症

49. アルコール使用障害

48. 児童虐待

47. 双極性感情障害

46. 社交不安障害

45. 摂食障害

アメリカ心理学会 (APA) の粋を結集した疾患別心理療法マニュアル

最大の治療効果を目指した臨床テクニックが満載

- 大事なポイントには、内容を要約した「臨床のツボ」が付されています
- 実際の臨床場面などを描いた「臨床スケッチ」により、より理解を深められます
- 欄外の見出しにより、参照したい項目がスムーズに探し出せます
- アセスメントやクライアントとのコミュニケーション・ツールとして役立つ付録も充実
- 第一線で活躍する訳者が、読みやすい翻訳で正確に内容を伝えます

全9巻の構成

1. 双極性障害
2. 強迫性障害
3. 児童虐待
4. 統合失調症
5. ADHD
6. ギャンブル依存
7. アルコール使用障害
8. 社交不安障害
9. 摂食障害

ホームページへのリンク

<http://kongoshuppan.co.jp/ctlg/ct.php?cd=c1000>

監修者序文より

このシリーズは米国心理学会（APA）の傘下にある米国医臨床心理学会の支援のもとに編集発刊されている。各巻の著者は臨床経験豊かなその分野の第一人者である。このシリーズの編集方針は、まず何よりも実務にすぐ利用できる読みやすいコンパクトな本であるということである。それ故に、豊富な図表、臨床のツボ、症例のスケッチ、患者教育資料がちりばめられている。そして記載された技法や理論の基礎となる文献が豊富に引用されている。このシリーズの本は、心理療法家の頂点に立つ指導者から裾野で訓練を受けている学生まで全ての人の診察室やカウンセリングルームに置かれる価値があると思う。



44. 強迫性障害への認知行動療法：講義とワークショップで身につけるアートとサイエンス

ポール・サルコフスキス著 小堀修・清水栄司・丹野義彦・伊豫雅臣(監訳) 星和書店 2011

内容紹介

伝統的な行動療法的アプローチと認知療法的アプローチを統合し、強迫性障害への認知行動療法を開発・確立した著者、ポール・サルコフスキス。本書は第9回認知行動療法学会・第35回日本行動療法学会にて大好評を博した氏の講演およびワークショップを完全収録。強迫性障害の認知行動療法の科学と実践を「話し言葉で」理解するための1冊。

ポール・サルコフスキス教授により開発された強迫性障害の認知行動療法を、話し言葉で紹介する。第9回認知行動療法学会と第35回日本行動療法学会の同日開催にてサルコフスキス教授による基調講演とワークショップが行われた。大好評を博したこの講演とワークショップを臨場感そのままに本書に収録。

43. 統合失調症を理解し支援するための認知行動療法

D. ファウラー、E. カイパース、P. ガレティ著

石垣琢磨・丹野義彦（監訳） 東京駒場C B T研究会（訳） 金剛出版 2011

内容紹介

統合失調症患者が妄想と幻聴への「信念」を手放さずにいるとき、治療者はいかにして理解を進め、支援の手を差し延べることができるのか。患者の問題を協同して精査する構造的アセスメント、個々の患者に適したケースフォーミュレーション、患者のニーズに即した支援テクニック—この三位一体により認知行動療法は、やがて比類なき独自性を得て創造的な姿へと可塑的に変容する。統合失調症治療の構造を精緻化しつつ再考するための認知行動療法原論。

42. アメリカこころの臨床ツアー：アメリカ精神医学・心理学臨床施設の紹介

丹野義彦 星和書店 2010

内容紹介

本書は、アメリカの7大都市の大学めぐり・病院めぐりの旅行ガイドブックです。

ニューヨークやサンフランシスコなどの7大都市をとりあげて、大学キャンパスを散歩し、臨床心理学や精神医学の臨床施設の歩き方を解説しています。実際に足で稼いだ情報満載。メトロポリタン美術館から「ミシュラン」三ツ星のハーバード大学まで…、従来のガイドブックとは一味違うアメリカを見せてくれる。アメリカの医学や心理学の実態、歴史などの入門書としても楽しめる一冊。

→アマゾン・コムの本書へのリンク

→星和書店の本書へのリンク

このホームページでは、本書で紹介した写真のカラー原版を公開し、インターネットのリンクを張っています。本書を読まれる際には、ぜひこのリンクもご活用ください。

→〈写真原版とホームページへのリンク〉

目次

1. ニューヨーク：医学都市ニューヨークをめぐる
2. ボストン：一度は行ってみたい大学の街ボストン
3. フィラデルフィア：フィラデルフィア詣でをしてみませんか
4. ボルチモア：大学史に燦然と輝くジョンズ・ホプキンス大学を訪ねる
5. ワシントン D.C.：アメリカの首都を見て日本を考える
6. ロサンゼルス：エンターテインメント都市ロサンゼルスの大学
7. サンフランシスコ：医学の街サンフランシスコ

41. 発達障害の臨床心理学

東條吉邦・大六一志・丹野義彦（編） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第6巻

東京大学出版会 2010

内容紹介

2005年の「発達障害者支援法」制定以降，ますます重要性をます発達障害への心理学的援助．一線の研究者＝実践者が，脳科学をはじめとする生物学的知見や，医療，学校，地域との社会的連携までを視野にいれた「発達障害の臨床心理学」の見取り図を描く．

主要目次

はじめに（東條吉邦・大六一志・丹野義彦）

第1部 広汎性発達障害（自閉症スペクトラム）

1章 自閉症スペクトラムの発達認知神経心理学（神尾陽子）

2章 広汎性発達障害への行動論的アプローチ（井上雅彦）

トピックス1 ソーシャルストーリーによる自閉症スペクトラム支援（安達 準）

トピックス2 自閉症児は目を見ない？（千住 淳）

トピックス3 自閉症スペクトラムのアナログ研究（若林明雄）

第2部 注意欠如・多動性障害（ADHD）

3章 ADHD研究の現在（田中康雄）

4章 ADHDの心理社会的介入（加藤美朗）

トピックス4・ADHDの生理心理学的研究（岡崎慎治）

トピックス5・ADHDのアセスメント（篠田晴男）

第3部 学習障害（LD）

5章 読み書きの障害（宇野 彰・三盃亜美）

6章 特異的言語発達障害（SLI）（辰巳 格・渡辺眞澄）

トピックス6・学習障害とCAI（東原文子）

トピックス7・算数障害（熊谷恵子）

第4部 学習障害に関連した研究

7章 発達性協調運動障害（DCD）（是枝喜代治）

8章 発達障害と不登校（宮本信也）

9章 発達障害と非行（定本ゆきこ）

10 章 早期（適正）発見と 5 歳児健診（小枝達也）



40. 認知行動療法 100 のポイント

M.ニーナン、W.ドライデン(著) 石垣琢磨・丹野義彦(監訳) 東京駒場C B T研究会(訳)
金剛出版 2010

内容紹介

認知行動療法は論理的で知的なクライアントだけに効果がある？ 感情に焦点をあてない？ 大切なのはポジティブ思考？ クライアントの過去は一切無視？ …これら認知行動療法にまつわる疑問と誤解をまとめて解消！ 100 のポイントとテクニックで認知行動療法をコンパクトに解説。臨床家必携クイック・リファレンス。

39. 臨床と性格の心理学

丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨 心理学入門コース6 岩波書店 2009

内容紹介

現代社会に生きる私たちにとって、うつ病、PTSD、統合失調症などの心理的な不調は身近な問題である。私たちはどのように心の変調と向き合えばよいのだろうか。心理学では、性格の成り立ちや偏り、認知の傾向などから心の問題の発生メカニズムを解明し、エビデンス(実証)にもとづいた治療や援助を行う。臨床心理の両輪をなす理論と実践について具体的な心理療法や症状を用いて解説する。

あとがき

精神分析は時代遅れ。かわって注目されている認知行動療法を全面的に紹介。日本で一番進んだ臨床心理学の教科書。駒場キャンパスは、臨床心理学の東京学派の最先端の牙城。

世界の心理学では、現在、3つの大きなパラダイムシフトがおこりつつある。第1は、本書で述べたように、精神分析療法から認知行動療法のパラダイムシフトである。認知行動療法は基礎心理学から出てきた技法であるから、このシフトは、心理療法が基礎心理学に裏づけられるようになった動きと言ってもよい。第2は、エビデンス(実証)にもとづく実践が定着したことである。これまで臨床家の勘だけに基づいていた実践が、科学的なエビデンスにももとづいておこなわれるようになった。その根底には、基礎心理学と実践的心理学の交流が進み、基礎心理学の成果や方法論が実践にうまく生かせるようになったことがある。第3は、職業としての実践的心理学の確立である。英米では、科学者-実践家モデルにもとづいて訓練された臨床心理士が国家資格を持ち、臨床の現場で活躍するようになった。研究中心から実践支援へと心理学のパラダイムシフトがおこっていると言ってもよい。これら3つの動きはバラバラにおこったのではなく、互いに関連しながらおこったものである。認知行動療法の普及は、このような地殻変動の結果であって、一時的な流行などではない。こうした世界の流れからみると、日本の臨床心理学は遅れていると言わざるをえない。

臨床心理学はこれからどんどん伸びていく領域であり、若い世代の活躍が期待されている。臨床心理学を志す方は、ぜひ世界のパラダイムシフトに目を向けていただきたい。

38. 医療心理学を学ぶ人のために

丹野義彦・利島保（編） 世界思想社 2009

内容紹介

医療現場に必要な心理学とは？ 病院や地域社会で活動する心理師の実態を描き、医療心理学とは何かについて、わかりやすく説明。心理師が身につけるべき技能を伝授し、養成制度も紹介。実証にもとづく医療心理学の実践と理論がわかる入門書。

目次

第I部 医療心理学の実践と理論

- 第0章 インTRODクシヨン （丹野義彦）
- 第1章 心療内科の現場と行動医学 （富家直明・坂野雄二）
- 第2章 精神科の現場と臨床心理学 （石垣琢磨）
- 第3章 小児科の現場と発達心理学 （小西行郎・遠藤利彦）
- 第4章 臨床神経心理学の現場と神経心理学 （松井三枝）
- 第5章 ストレスマネジメントと健康心理学 （津田 彰・稲谷ふみ枝）
- 第6章 健康支援活動と生理心理学 （山田富美雄）
- 第7章 自殺対策と社会心理学 （田中江里子・坂本真士）
- 第8章 先端医療への支援活動と心理学 （鈴木伸一）
- 第9章 司法精神医学の現場と心理学 （齋藤慶子）

第II部 心理師が身につけるべき技能

- 第0章 インTRODクシヨン （丹野義彦）
- 第1章 心理査定：ケース・フォーミュレーションとケース・マネジメント （丹野義彦）
- 第2章 異常心理学 （丹野義彦・杉浦義典）
- 第3章 心理療法 （佐々木 淳・丹野義彦）
- 第4章 治療効果の測定 （岡田太陽・市井雅哉）
- 第5章 チーム医療活動：多職種とのコラボレーション （齋藤慶子）
- 第6章 リエゾン活動 （齋藤慶子）
- 第7章 スーパービジョンと臨床実習 （伊藤絵美）

第8章 臨床現場における心理学研究 (横田正夫)

第III部 心理師の養成と資格制度

第0章 イントロダクション (利島 保)

第1章 日本の心理師の養成カリキュラム (利島 保)

第2章 ヨーロッパの医療心理学に学ぶ (辻 敬一郎)

第3章 アメリカの医療心理学に学ぶ (松見淳子)

医療心理学を学ぶ人のための推奨文献

この本のねらい

現代の日本は、うつ病やストレスといったメンタルヘルス（心の健康）の問題を抱えています。こうしたメンタルヘルスの問題は、日本社会がとりくむべき最優先課題といえるでしょう。こうした社会的要請の最先端にあるのは医療現場であるといえます。医療現場では、医師をはじめ、看護師、心理師、ソーシャル・ワーカーなど、多くの専門家が協力して仕事をしています。こうした医療現場で働く心理師は、近年「医療心理師」と呼ばれるようになりました。そして、その国家資格化の可能性も現実味を帯びてきています。そこで、私たちは、医療心理学とは何かについて、一般読者にわかりやすく伝え、医療心理師の活動の実態について広く知っていただくために、この本を作りました。

第I部では、いろいろな医療現場において、医療心理師がどのような活動をしているのかを解説します。また、基礎的な心理学が、医療心理師の実践や研究に大きく役立っていることについて述べます。

第II部では、これから医療心理師を学びたい人に向けて、医療心理師が身につけるべき技能について解説します。

第III部では、医療心理師という資格制度にむけた取り組みや、医療心理師の養成について述べます。

この本全体を通して、医療心理学の基礎的な考え方を伝えると共に、医療心理学の楽しさや難しさについて考え、これから医療心理学を学ぶ人のためのメッセージを伝えたいと思います。

37. 心理学の謎を解くー初めての心理学講義ー

繁樹算男・丹野義彦（編） 医学出版 2008

内容紹介

「ねずみから人間の脳への迷路」 これはねずみについて解っていることから、人間の脳の活動について解っていることをつなげるには、未だに迷路だらけであることの比喩である。

本書は、10人の研究者が執筆・考案した入門書である。彼らはそれぞれ、この「迷路」を解くために自分の専門領域の先端で格闘してきた。本書には10人それぞれが基本的な問いを2つずつ持ち寄って編まれた20の問いを収録した。「問い」と、それに対する「答え」を読むことによって、今まで知らなかったこと、あいまいであったことがはっきりし、またその反面、新たな問いが生じるに違いない。

本書がいざなう心理学の豊穡な知識の世界をご堪能いただきたい。

目次

- 1章 見ることを科学するー視覚の認知心理学
- 2章 血筋か育ちかー発達心理学入門
- 3章 勉強に王道はないかー記憶と理解の心理学
- 4章 先の手を読むー思考・問題解決・推理
- 5章 喜怒哀楽を感じる心ー感情心理学入門
- 6章 心の不適応ー臨床心理学入門
- 7章 社会における人間ー社会心理学入門
- 8章 精神の物質的基礎ー脳と意識
- 9章 人の行動や心の進化ー進化心理学入門
- 10章 心理学のための方法論

36. ロンドン こころの臨床ツアー

丹野義彦 星和書店 2008

内容紹介

本書は、ロンドンの大学めぐり・病院めぐりの旅行ガイドブックです。

ロンドンの大学のキャンパスを散歩し、臨床心理学や精神医学の臨床施設の歩き方を解説しています。実際に足で稼いだ情報満載。シャーロック・ホームズ博物館からセント・トーマス病院まで……。画期的なロンドンの新しいガイドブックです。ロンドンの医学や心理学の実態、歴史などの入門書としても楽しめる一冊。

→アマゾン・コムの本書へのリンク

→星和書店の本書へのリンク

このホームページでは、本書で紹介した写真のカラー原版を公開し、インターネットのリンクを張っています。本書を読まれる際には、ぜひこのリンクもご活用ください。

→〈写真原版とホームページへのリンク〉

目次

1. ハムステッド精神分析地区： こんなに面白いハムステッド地区
2. ブルームズベリー西部地区： ロンドン入門としてのブルームズベリー地区
3. ブルームズベリー東部地区： こんなに面白いブルームズベリー東部地区
4. バービカン地区： こんなに面白いバービカン地区
5. ストランド地区： ロンドンのへそ
6. ウェストミンスター地区： これだけは見のがせないウェストミンスター地区
7. デンマーク・ヒル地区： こんなに面白いデンマーク・ヒル地区
8. ベスレム王立病院地区： 世界最古の精神科病院のひとつ
9. リージェンツ公園地区： こんなに面白いリージェンツ公園地区
10. ハイゲート地区： こんなに面白いハイゲート地区
11. ロンドンこころの臨床ツアーの底流をさぐる： こころの臨床ツアーとフリート川・タイバーン川の不思議な関係

35. 対人恐怖とPTSDへの認知行動療法：ワークショップで身につける治療技法
丹野義彦（編集・監訳）、D. M. クラーク、A. エーラーズ（著） 星和書店 2008

内容紹介

日本の認知行動療法に大きなインパクト！ クラークが開発した社会不安障害(対人恐怖)への認知行動療法。エーラーズが開発した PTSD への認知行動療法。彼らが日本で行った貴重な講演とワークショップから、その理論と治療技法を学んでみましょう。今や、認知行動療法は世界の心理療法の主流。世界からの追い風を受けて躍進する、エビデンスのある心理療法を身につけるチャンスです。

日本の認知行動療法に大きなインパクトを与えてくれる一冊です。

目次

- 第1章 【理論編】社会不安障害（対人恐怖）への認知行動療法
- 第2章 【実践編】社会不安障害（対人恐怖）への認知行動療法
- 第3章 【解説】クラークはどのような研究と臨床実践をしてきたか
- 第4章 【理論編】外傷後ストレス障害（PTSD）への認知行動療法
- 第5章 【実践編】外傷後ストレス障害（PTSD）への認知行動療法
- 第6章 【解説】エーラーズの理論と実践

34. 臨床認知心理学

小谷津孝明・小川俊樹・丹野義彦（編） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第5巻

東京大学出版会 2008

内容紹介

基礎研究と臨床実践のインターフェースは、いま、認知行動療法、精神分析療法、森田療法などの機序を実証的に明らかにし、療育などにおける認知心理学研究の実践性を同時に切り拓いている。本書は、臨床に携わる人の絶好のヒント集であり、実証的な認知心理学研究の実践性を確かに示す書である。

担当編集者から

「認知行動療法」は、臨床心理学とその実践の中心的な役割を果たしていますが、では、それは「なぜ効く」のか？ 本書の前半では、精神分析や森田療法も含め、「なぜ効く」のか、さらに有効であるためにはどうしたらよいか、謎解きの面白さがあります。後半では、実証的な認知研究とは、実は日常や臨床での有効性をつねに伴った営みであったことを、先達の仕事から学びます。とかく「アート偏重」「無機質な研究」と分けられがちな実践と研究が、見事に融合している例を読んでいただけたらと思います。

目次

はじめに：臨床心理学と認知心理学のインターフェース（丹野・小川・小谷津）

I 心理療法の認知心理学

1章 認知療法と認知心理学（丹野）

2章 問題解決療法と認知心理学（伊藤絵美）

3章 リハビリテーションと神経心理学（梅田聡）

4章 精神分析療法と認知心理学（岩崎徹也）

5章 森田理論と認知心理学（辻平治郎）

・臨床認知心理学をめぐる——臨床認知心理学とライフサイクル（小谷津）

II 精神病理の認知心理学

6章 病理学的方法と心理学（小川）

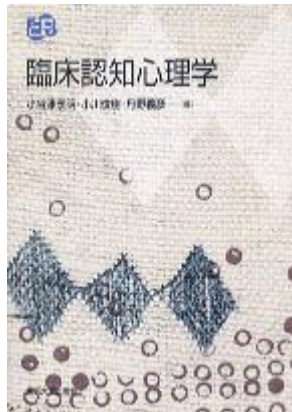
7章 視覚——先天盲開眼者への心理学的援助から（鳥居修晃）

8章 聴覚——聴覚障害児に学ぶ世界（斎藤佐和）

9章 自己——自我漏洩感から（佐々木淳）

10 章 言語——言語障害児の療育から（鹿取廣人）

あとがき（丹野・小川・小谷津）



33. ワークショップから学ぶ認知行動療法の最前線 うつ病、パーソナリティ障害、不安障害、自閉症への対応

丹野義彦・坂野雄二（代表編者） 世界行動療法認知療法会議神戸大会プログラム委員会
（編） 金子書房 2008

内容紹介

世界行動療法認知療法会議神戸大会（2004年）にて行われたベテラン心理臨床家によるワークショップの記録。アセスメントの仕方、面接スキルの使い方を具体的に示した実用書。

目次

1章 認知行動療法におけるケースフォーミュレーションと治療計画

ジャクリーヌ・B・パーソンズ

翻訳：田中共子，植松佳子，永谷文代

2章 認知行動療法——心理的障害への治療

キース・S・ドブソン，ドナルド・G・ビール

翻訳：井上和臣，今井敦子，高井昭裕

3章 スピリチュアルに導かれた行動療法：東洋と西洋の合流

アーサー・M・ネズ，クリスティン・M・ネズ

翻訳：坂野雄二，笹川智子

4章 児童期・青年期の不安障害の性質と治療

ロナルド・M・ラペー

翻訳：陳 峻？，大対香奈子，石川信一，佐藤 寛

5章 自閉症児の行動分析療法

スヴェイン・アイカセス

翻訳：中野良顯

32. ワークショップから学ぶ認知行動療法の最前線 PTSD、強迫性障害、統合失調症、妄想への対応

丹野義彦・坂野雄二（代表編者） 世界行動療法認知療法会議神戸大会プログラム委員会
（編） 金子書房 2008

内容紹介

世界行動療法認知療法会議神戸大会（2004年）にて行われたベテラン心理臨床家によるワークショップの記録。難しい事例への介入方法や症状のとりえ方を具体的に示した実践書。

目次

- 1章 PTSDの現象学，神経生物学，および治療について
ベセル・A・ヴァン・ダー・ヨーク
翻訳：市井雅哉，菊池安希子，比嘉美弥，榎日出夫，吉川久史
- 2章 強迫性障害の診断と認知行動療法
エドナ・B・フォア
翻訳：西澤 哲
- 3章 統合失調症の人のための生活技能訓練（Social Skills Training, SST）
キム・ミューザー
翻訳：池淵恵美
- 4章 統合失調症に対する対処ストラテジー増強法（CSE）
ニコラス・タリア
翻訳：丹野義彦
- 5章 妄想に対する認知行動療法
エマニュエル・ピーターズ
翻訳：石垣琢磨

31. 認知療法・認知行動療法事例ワークショップ（1）

伊藤絵美・丹野義彦（編著） 星和書店 2008

内容紹介

認知療法・認知行動療法は実際にどのように行われているのか。ワークショップの記録を中心に認知行動療法を「事例」という視点からまとめた本書は、臨床の現場を詳細に説明・解説している。クライアントがどのように変わっていったのかという経緯を知ることができる。参加者からの疑問や質問に対する回答も詳しく掲載されている。全体を通じて、スーパービジョンの重要性がクローズアップされている。スクールカウンセラー、企業の相談室など、多くの現場で役立つ必携の一冊。

目次

- 第1章 認知療法・認知行動療法の実践家を育てるためには
- 第2章 当機関での CBT 実践について
- 第3章 事例1：セルフモニタリングによる気づきをきっかけに大きく面接が展開した事例
- 第4章 事例2：侵入思考が現実化する不安に対して認知再構成法を導入した事例
- 第5章 事例3：認知再構成法と行動実験によって症状が改善した事例
- 第6章 事例4：軽度発達障害の成人男性と共に継続的なアセスメントを展開している事例
- 第7章 解説と展望

30. パーソナリティと臨床の心理学：次元モデルによる統合

杉浦義典・丹野義彦 培風館 2008

内容紹介

パーソナリティと臨床の心理学の現在の姿について、通常の入門書では扱われないような最先端の知見を積極的にとりいれて解説した書。本書のキーワードは、連続的なものさし上で心理学的事象をとらえる「次元モデル」である。パーソナリティではビッグ・ファイブを、臨床に関しては精神疾患と健常群のあいだの連続性、さまざまな精神疾患のあいだの共通性などをとりあげる。

補足

パーソナリティ心理学も臨床心理学も人の個性を扱うものですが、どちらも非常に多くの概念が乱立し、より深い人間理解に寄与するどころか、かえって混乱させているのが現状です。本書では、統計的な手法による分類という手段に依存しながら、様々な減少やモデルの再統合をするという方向を提唱したものです。いうなれば、心の博物学にあたるでしょう。

具体的には、様々な種類の心の病の共通点を探ることで、より効果的な治療が見えてくることや、心理的な治療法も分類と再統合をはかることで、より効果的な治療がみえてくることを示しました。

目次

- 1章 分類は科学的研究の出発点 —操作的診断基準とパーソナリティ特性論
- 2章 パーソナリティの基本次元 —ビッグ・ファイブの八件
- 3章 臨床的問題とパーソナリティ —接近しつつある研究領域
- 4章 うつ病の理論と臨床 —ベックの認知療法
- 5章 うつ病の素因の安定性 —変化しにくい素因から距離をおく
- 6章 不安の理論と臨床 —症状に応じた認知行動療法
- 7章 不安・うつ病の統合モデル —マクロなパーソナリティからみたうつ病と不安障害
- 8章 変わりだねの不安を理解する —心配のメカニズム
- 9章 さらに幅広い病理の構造を知る —内在化—外在化モデル
- 10章 心理療法の技法を分類する —効果的な治療に共通する特徴

あとがき

臨床心理学の人気は今も昔も非常に高い。多くの学生も、皆何らかの悩みを抱えているわけで、それだけ親しみもわくのだろう。しかし、いざ学びはじめてみると、さほど親しみやすい訳でもないことに気づくことが多いのではないだろうか。例えば、知覚心理学では、我々が日ごろ何げなく行っている（むしろ、行っているという意識すらない）、ものを見たり聞いたりという現象を扱う。むろん、現象は当たり前でも、決してそのメカニズムは単純ではない。それがゆえに醍醐味がある。

一方、臨床（Clinical）という言葉が文字通り解釈すれば、メンタルヘルスの現場（クリニック）で働いたことのない多くの学生にとっては、縁の遠い世界ともいえる。実際、筆者の一人である杉浦が大学で臨床心理学を学び始めたころは、例えば卒業論文で臨床的テーマを扱う、などということはなかなか考えにくいものであった。臨床心理学は現場で実際のクライアントさんを対象にしなくてはできないもの、という思いがあったためである。

転機が訪れたきっかけは、大学3年生の時に、もう一人の著者丹野のゼミを受講したことである。のちに、「認知臨床心理学—認知行動アプローチの実践的理解のために（東京大学出版会）」として日本語訳が出版されることになる Dryden & Renthoul (1991) の翻訳をベースにしたゼミでは、大学生などの一般サンプルを対象にして臨床心理学的なテーマを扱う、アナログ研究という発想に触れることになった。臨床心理学や異常心理学は何か特別なもの、というイメージを抱いていた駆け出しの学生にとって、そのような普通さは逆に強烈な印象を残した。

それに触発されて、卒業論文では、大学生を対象に強迫観念を質問紙で測定する研究を行った。当時は、アナログ研究を紹介した日本語の解説書もなかった。また、臨床群の強迫症状と健常者におけるそれは質的に違うはずであるという指摘も繰り返し受け、研究は難航した。

3章で紹介した taxometric analysis を用いて、連続性に直接踏み込んだ研究はそもそも当時の日本では知られていなかったため、上記のような反論に自信をもって応えることはできなかった。しかし、石の上にも三年ということばの通り、研究を続けるうちに、徐々に卒業論文で大学生などを対象に強迫症状などを研究する人が増えて来た。アナログ研究は、欧米ではかなり前からつきとした研究スタイルとして存在していたが、情報が少なかつたため、そんなことができるはずがない、という誤解に立ち向かうことはむずかし

かったのである。今では、丹野の研究室ではアナログ研究は主要な研究スタイルとなり、抑うつ、不安、さらには統合失調症までを対象とした研究が盛んに行われ、多くの論文が生産されている。杉浦も2004年からゼミ生を指導するようになり、アナログ研究による卒業論文が多数生まれている。

本書で取り上げた研究はアナログ研究だけとは限らない。しかし、丹野も杉浦もアナログ研究を主要な方法論としている。これは、臨床心理学を若い学生にも親しみのあるものにするという意義があると考えている。著者の願いは何よりも、読者自身が本書を読む過程で、臨床心理学やパーソナリティ心理学という思索の営みに参加してもらうことである。先に述べたように、臨床心理学が現場での経験からのみ生まれるとすれば、大学生、あるいは興味をもつ高校生も含めて、現場で働いていない以上、「部外者」としての以上の関わり方はできない。疑問を抱いても、それは経験がないために、仕方がないと納得するしかないだろう。本書では、むしろ現在進行中の研究も多く紹介することによって、読者諸子に積極的に疑問を抱き、考えてもらうことを重視した。このように、新しい知見を紹介することを重視したため、図書館などで見かける「臨床」や「パーソナリティ」に関する多くの書物とは随分異なっているだろう。難解に感じられるかもしれないが、これが本当の姿なのである。

研究には、脳画像研究など、特別な設備が必要なものも多く存在する。一方で、簡単なアンケートを行ったり、自分の手で集められる範囲の情報を、2章でも紹介したKJ法で分類・整理してみるなどは、だれもが少し手を掛ければできることである。本書で繰り返し論じたように、不可思議で理解した難い「病理」の手掛かりは案外我々の日常生活の随所に隠れているかも知れない。同様に、一見取っ付きにくいように見える「研究」という営みも、その入り口は我々の素朴な疑問である。素朴な疑問に、常識的な答えを当てはめて満足してしまえば、そこで探求は終わりである。それを少し手をかけて調べれば、研究というすばらしい知的興奮への扉が開かれるのである。

29. 臨床社会心理学

坂本真士・丹野義彦・安藤清志（編） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第4巻

東京大学出版会 2007

内容紹介

対人不安や感情の問題からグループワーク，ソーシャルサポートまで——集団やコミュニティへも実践の場を広げつつある臨床心理学と，個人から社会までを網羅する幅広い枠組みと研究実績を有する社会心理学の，相互循環的協働を推進する一冊。

担当編集者から

主に，基礎的な理論や量的データを重視し日常の問題を扱う「社会心理学」と，現場での実践や質的データを重視し病理域の問題を扱う「臨床心理学」。一見，相容れないようにも思える両者ですが，自己や対人関係の問題を中心的に扱う点では共通しており，最近の認知過程を重視する流れや研究方法の歩み寄りなどにより，そのインターフェース領域である「臨床社会心理学」は，ますます進展しています。

本書は，「臨床社会心理学」の生まれた背景や現状を概観する第Ⅰ部，日本人社会心理学者オリジナルの，臨床的価値が高く，実践に適用されている研究を集結したレビュー的位置づけの第Ⅱ部，さまざまな側面から，社会やコミュニティという大きな枠組みのなかでの意味ある実践の可能性を探る第Ⅲ部，で構成されています。

人間の適応の理解，適応における問題の解決，適応を高めるための予防・介入を目的として，さらなる交流・協働をめざす「臨床社会心理学」。成長期にある学問の魅力が満載の一冊です。

主要目次

I 臨床社会心理学とは何か

- 1 臨床社会心理学は何をめざすか（坂本真士・安藤清志・丹野義彦）
- 2 臨床社会心理学の歴史と現状（安藤清志）

II 臨床社会心理学の実際

- 3 シャイネス（菅原健介）
- 4 自己開示——語りの治癒力（余語真夫）
- 5 攻撃と怒り（湯川進太郎）

6 ソーシャルサポート (福岡欣治)

7 ソーシャルスキル (相川 充)

8 患者役割 (山本和郎)

9 親密な関係と離死別 (松井 豊)

10 グループワーク (津村俊充)

III 「臨床社会心理学」への視点

11 臨床心理学からみた臨床社会心理学——認知行動療法の実践から考える (伊藤絵美)

12 社会心理学からみた臨床社会心理学——個人から社会へのつながりにこそ well-being
を見出す (大坊郁夫)

13 実践からみた臨床社会心理学——臨床心理学と社会心理学の実践的融合 (田中共子)

14 ヘルスケア・システムからみた臨床社会心理学——フィールドワークからの接近 (大
橋英寿)



28. 統合失調症：基礎から臨床への架け橋

M. バーチウッド C. ジャクソン（著） 丹野義彦・石垣琢磨（訳） 東京大学出版会

2006

内容紹介

統合失調症のメカニズム・臨床について、生物・心理・社会の三つのレベルからバランスよく網羅的に解説した教科書を翻訳。訳者による関連コラム、解説、読書案内なども加え、臨床に必要な知識や新たな知見をわかりやすく紹介。

目次

- 1 統合失調症とはなんだろう？
- 2 疫学からみた統合失調症——経過と予後
- 3 生物学からみた統合失調症
- 4 社会学からみた統合失調症——ストレス脆弱性モデル
- 5 心理学からみた統合失調症
- 6 生物学的介入法——薬物療法
- 7 社会的介入法
- 8 心理学的介入法

付録 もっと学びたい人のための読書案内

日本語で読める統合失調症の文献案内

解説 統合失調症の認知行動療法（石垣琢磨）

監訳者 あとがき

本書は Birchwood, M. & Jackson, C. 2001 *Schizophrenia*. Psychology Press. の全訳である。

筆者がバーチウッドの仕事を翻訳するのは、これで3回目になります。

最初に訳したのは、ドライデンとレントゥル編『認知臨床心理学入門』に収録された論文です。バーチウッドの論文は新しい情報が集約されていて、新しい世界を知る興奮を味わいました。この人はどんな環境で仕事をしているのだろうと思い、筆者は、2000年の秋に英国を訪問した際に、バーチウッドの研究室を尋ねる約束をしました。しかし、どうしても日程の都合がつかず断念しました。バーチウッドと初めて会うことができたのは、2001年にグラスゴウで開かれた英国行動認知療法学会でした。この時に日本に招待し、

2001年9月には来日しました。日本心理臨床学会で講演をおこない、東京大学で臨床ワークショップをおこないました。ちょうどニューヨークで同時多発テロがおこった翌日のことでした。バーチウッドはふたりの息子さんをつれて来日しました。その来日ワークショップは、『認知行動療法の臨床ワークショップ：サルコフスキスとバーチウッドの面接技法』（金子書房）に収録されています。これがバーチウッドの仕事を翻訳した2回目になりました。バーチウッドの温厚な人柄については、この本のあとがきに書きました。

バーチウッドのワークショップの本ができあがったのは、ちょうど筆者が留学中の2002年のことでした。日本からできたての本が送られてきたので、筆者は、この本を届けるために、バーミンガムを訪ねました。ちょうど、石垣氏と、筆者の研究室の統合失調症研究グループの大学院生が英国を訪ねてきた時でした。そこで、みんなでバーミンガムのバーチウッドを尋ねることにしました。そこで、バーチウッドと再会を果たすとともに、早期介入の施設を見学することができました。バーチウッドが、毎日大学で仕事をしているのではなく、臨床施設の中で研究を続けていることには感動しました。臨床心理学の研究教育は、臨床施設の中でおこなう必要があることを痛感しました。英国ではそれが当たり前です。こうしたことは、学会でバーチウッドと話していてもわからないことであり、バーチウッドの職場を訪問して初めて知ったことでした。

2001年にバーチウッドが来日したときに、印刷されたばかりの『統合失調症』という本を贈られました。この本を読んでみると、生物・心理・社会モデルからバランスよく解説した名著であることがわかりました。また、第5章の心理学理論や第8章の心理学的介入については、日本ではこれまであまり知られていませんでした。そこで、紹介する価値は大きいと考えて、翻訳することにしました。それが本書です。

監訳者は、東京大学出版会から統合失調症に関連する一連の本を出版してきました。

ドライデンとレントゥル（編）丹野義彦（監訳）『認知臨床心理学入門』

石垣琢磨『幻聴と妄想の認知臨床心理学』

丹野義彦・坂本真士『自分のところからよむ臨床心理学入門』

下山晴彦・丹野義彦（編）『講座臨床心理学4 異常心理学Ⅱ』

横田正夫・丹野義彦・石垣琢磨（編）『統合失調症の臨床心理学』

本書はこれらに続いて6冊目になります。

27. 侵入思考：雑念はどのように病理へと発展するのか

D. A. クラーク（編） 丹野義彦（監訳） 星和書店 2006

内容紹介

本書は、意思とは無関係に生じる侵入的な思考が心理的障害に果たす役割について論じた初の書である。侵入思考が、強迫性障害、外傷後ストレス障害、うつ病、全般性不安障害、不眠症など、数多くの心理的障害の重要な認知的特徴であることを示すエビデンスが得られつつあるいま、本書は、今後研究の進展が予想されるこの分野への扉を開くものである。

目次

第一章 健常者にみられる侵入思考：臨床的障害との関連性

デイビッド・A・クラーク シェリー・ライノ

第二章 外傷後ストレス障害における侵入思考

シェリー・A・ファルセッティ ジアンヌ・モニエー ハイジ・S・レズニック

第三章 慰安を求め絶望に出会う：うつ病における侵入思考の持続

リチャード・M・ウェンツラフ

第四章 不眠症にみられる侵入思考

アリソン・G・ハーヴェイ

第五章 心配、侵入思考、全般性不安障害：メタ認知理論と治療

エイドリアン・ウェルズ

第六章 考えることは信じるということ—強迫性障害における自我異和的な侵入思考—

デイビッド・A・クラーク キーロン・K・オコナー

第七章 精神病と侵入思考

アンソニー・モリソン

第八章 性犯罪者の侵入思考・空想—その性質・持続性・治療—

W・L・マーシャル カルビン・M・ラングトン

第九章 意思とは無関係な侵入思考—現状と将来の方向性—

クリスティン・C・パードン

訳者あとがき

本書は、デイビッド・A・クラーク (David A. Clark) が編集した”Intrusive Thoughts in Clinical Disorders: Theory, Research, and Treatment” (Guilford Press, 2005 年) の全訳である。

侵入思考とは、日本語では「雑念」という語に近いだろう。侵入思考の研究は、日本ではまだなじみが薄いのが、欧米の臨床心理学ではいろいろな精神病理を理解する鍵概念と考えられるようになっている。

訳者のひとり (丹野) が侵入思考の研究に初めて触れたのは、1991 年に出版されたドライデンの『認知臨床心理学入門』 (のちに東京大学出版会より邦訳) を読んだ時であった。この本の中で、ゲイリー・ケントが、強迫観念と侵入思考の研究を紹介していた。侵入思考という考え方は実にリアルであると感じられたので、侵入思考の論文をずっと読んでいった。その起源は、ロンドン大学精神医学研究所のラックマンとデシルバが 1978 年に始めた強迫観念の研究であった。この研究を発展させて、オクスフォード大学のサルコフスキス (現在ロンドン大学精神医学研究所) は、1985 年に、侵入思考を強迫性障害の基本と位置づけ、認知行動モデルを提示した。サルコフスキスの研究が基本となって、強迫性障害の研究や治療は大きく前進した。こうした研究の流れについて、丹野は『エビデンス臨床心理学』 (日本評論社刊、2001 年) の中にまとめて紹介した。丹野の研究室では、侵入思考をテーマとして卒業論文や修士論文を書いた学生は数人に登る。また、このテーマは、臨床研究と非臨床アナログ研究を結びつける点でも研究室に大きな影響を与えた。

訳者のひとりである杉浦は、卒業論文で侵入思考と自動思考の比較研究を行った。本書でも、侵入思考と関連の症状 (心配など) との異同が詳細に論じられている。これらと比較することで、精神症状の多くに共通するコントロール出来なさに迫ることが期待できる。学位論文では侵入思考の中でももっとも意図的な (にもかかわらず、コントロール出来ない) 心配を取り上げた (風間書房から和文、英文で出版)。また、『講座臨床心理学 (東京大学出版会)』や『精神科診断学』の特集論文で強迫性障害における侵入思考の役割について論じた。一貫して侵入思考に興味をもってきたため、2001 年にバンクーバーで開かれた世界行動療法認知療法会議 W C B C T でクラークと会えたことは大きな感激であった。

訳者のひとりである小堀は、2005 年にギリシアで開かれたヨーロッパ認知行動療法学会 (E A B C T) で、クラークが主催したシンポジウムにシンポジストとして招かれた。強迫観念と望まない侵入思考の文化差というテーマについて、4 カ国の研究者が発表を行い、ジャック・ラックマンが指定討論を務めた。

侵入思考はもともと強迫観念を理解する現象として取り上げられたが、のちには強迫観念だけでなく、不安障害一般 (例えば、全般性不安障害や P T S D など) を理解するため

にも用いられるようになった。最近では、精神病の幻覚や犯罪心理などを理解するためにも用いられるようになった。本書は、各領域を代表する著名な研究者が、侵入思考の研究を手際よくまとめ、さらに今後の研究の展望を示している。

3章を書いているリチャード・ウェンツラフは、思考抑制研究の第一人者、ダニエル・ウェグナーの共同研究者である。嫌な考えを追い出そうとすると却って執拗に浮かぶようになる、という説得力のある一般理論をうつ病の臨床的理解に応用した優れた研究を行ってきた。本書が遺稿となったことは非常にショッキングであった。

第5章のエイドリアン・ウェルズは、不安障害の認知行動理論で世界的に知られる理論家・臨床家である。丹野は、2001年には、バンクーバーで開かれた世界行動療法認知療法会議で、ウェルズの全般的な不安障害(GAD)の認知行動療法のワークショップを聞いた。これによって、臨床ワークショップの有効性に目覚めた(その時の様子は『認知行動療法ワークショップ(金子書房)』にまとめた)。また、ウェルズとマシューズの『心理臨床の認知心理学』(培風館, 2002)の翻訳にも加わった。この本は、侵入思考をはじめとして、精神病理の認知研究をまとめて紹介した本であり、英国心理学会の優秀出版賞を受けた力作であり、この分野の必読文献となっている。

第7章のアンソニー・モリソンは、統合失調症の認知行動理論で有名な若手の実力者である。訳者のひとりである山崎と丹野は、2003年にヨークで開かれたイギリス行動認知療法学会に参加し、その時にモリソンのワークショップ「PTSDと精神病」を聞くことができた。当時、モリソンは、本書で書かれた侵入思考と統合失調症について取り組んでいたのである。本書に登場するホロウィッツの研究からもわかるように、幻聴も侵入思考のひとつと考えることができる。山崎と丹野は、精神病の認知の問題を専門としており、こうした研究動向に強い関心を持っている。

ちなみに、不安障害の認知行動理論の研究で有名なデイビッド・クラークは2人いる。ひとりには本書を編集したカナダ人のデイビッド・A・クラークである。もうひとは、イギリスの認知行動療法のパイオニアで、ロンドン大学精神医学研究所のデイビッド・M・クラークである。こちらは2006年に来日の予定である。二人に聞いてみると、お互いによく間違われるということだった。

2005年にワシントンDCで開かれたアメリカ心理学会の会場において、丹野は本書を見つけて、ぜひ訳したいと思った。

26. 不安障害の臨床心理学

坂野雄二・丹野義彦・杉浦義典（編） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第3巻

東京大学出版会 2006

内容紹介

パニック障害、強迫性障害、社会不安など、多様で苦痛の多い不安障害。効果ある臨床実践の確立のため、基礎研究とエビデンスに基づいた臨床研究の最前線をまとめる。認知療法、エクスポージャー法、EMDRなど、10の心理療法をコラムで紹介。

担当編集者から

人前に出られない、どんなに手を洗っても洗う手がとまらない、電車のなかで突然激しい息切れと動悸が襲う、過去のショック体験がいきなりフラッシュバックする——「神経症」や「ノイローゼ」などと呼ばれ、フロイト以降は、数々の精神分析的解釈を触発したこれらの症状を、最近の臨床心理学では「不安障害」と呼び、人間の不安認知や対処行動から、その発生メカニズムを解明しつつあります。なにより重要なのは、このアプローチから編み出されたセラピーが、効果のエビデンスを挙げつつあること。「実証（エビデンス）にもとづく臨床心理学」のアプローチからの研究と、実践の最前線をまとめます。

目次

- 1 はじめに 不安障害の臨床心理学（丹野義彦・杉浦義典・坂野雄二）
 - I 不安障害の臨床研究
 - 2 パニック障害（陳峻?脩）
 - 3 強迫性障害（堀越勝）
 - 4 社会不安障害（原井宏明）
 - 5 外傷後ストレス障害（PTSD）（市井雅哉）
 - 6 特定の恐怖症（岩永誠）
 - 7 子どもの不安障害（石川信一）
 - II 不安研究の展開
 - 8 不安と抑うつ（福井至）
 - 9 不安と身体症状（熊野宏明）
 - 10 不安とストレス対処（杉浦義典）
- コラム 不安障害の心理療法

認知療法（井上和臣）

集団認知行動療法（古川壽亮）

EMDR（市井雅哉）

ストレス免疫療法（嶋田洋徳）

エクスポージャー法（飯倉康郎）

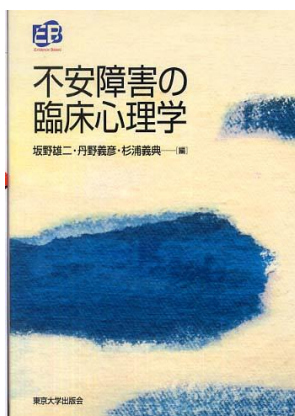
自己開示法（佐藤健二）

ヴァーチャル・リアリティ療法（宮野秀市）

子どもの認知行動療法（佐藤正二）

問題解決療法（金井嘉宏）

リラクゼーション法（坂入洋右）



25. 妄想はどのようにして立ちあがるか

P. ガレティ D. ヘムズレイ(著) 丹野義彦(監訳) ミネルヴァ書房 2006

内容紹介

被害妄想 関係妄想 非影響妄想 誇大妄想 微小妄想などなど誰にでも妄想は現れます。それを訂正できなくなれば精神病と診断されます。妄想を統計的に、実験的に読み解き、考察を重ねる推理小説のような冷静で知的な心理学！

目次

- 1 妄想はどのように定義されるか
- 2 健常者の推論には合理性があるのだろうか
- 3 統合失調症患者はどのような推論をするのか？
- 4 妄想をどのようにして測るか
- 5 妄想にはどんな特徴があるか
- 6 妄想はどのように発生するのか
- 7 「結論への性急な飛躍」は妄想へと導くか
- 8 妄想を持つ人は妄想をどのように捉えているか
- 9 妄想の発生の新しいモデル

監訳者あとがき

本書は、ガレティとヘムズレイ (P. Garety and D. Hemsley) による "Delusions: Investigations into the Psychology of Delusional Reasoning" (Psychology Press, 1997 年) の全訳である。

訳者解説 3 で述べたように、ガレティとヘムズレイは、ロンドン大学精神医学研究所の教授をつとめており、妄想の心理学的研究のバイオニアである。妄想のアセスメント法を開発し、発生メカニズムを考え、治療介入をおこなうという研究パラダイムを作った。彼らは、1994 年に、精神医学研究所内のモノグラフ (モーズレイ・モノグラフ) として、オクスフォード大学出版会から本書を出版した。本書は大きな影響力を持ち、需要が高まったため、1997 年に、サイコロジー・プレスから再出版され、一般にも入手しやすくなった。

監訳者も本書から影響を受けた 1 人である。大学院のゼミで本書を輪読して、その面白さに目を開かれ、本格的に妄想を研究するきっかけとなった。このテーマで文部科学省の科学研究補助金を得ることもできた。訳者の山崎と荒川は、ビーズ玉課題を用いたペイズ

的研究をおこない、修士論文や博士論文をまとめ、日本学術振興会の特別研究員にも選ばれた。研究室ぐるみで本書から影響を受けたとあってよいだろう。幸運だったのは、監訳者の属する心理学研究室には、ベイズ統計学を専門とする繁榊算男先生がいらしたことである。統計学的な雰囲気は身近になれば、ベイズ統計学を理解することは難しかっただろう。臨床心理学と基礎心理学のインターフェースが大切なゆえんである。

もうひとつの幸運は、2002年に、文部科学省の在外研究員として、ロンドン大学精神医学研究所に半年間滞在し、ヘムズレイやガレティの仕事ぶりを間近で見ることができたことである。イギリスで妄想研究を知るにつれて、本書が大きな影響力を持っていることを実感した。例えば、妄想の研究で有名なピーターズによると、妄想の研究をはじめのきっかけとなったのは、本書を読んだことであるということであった。また、ロンドン滞在中には、妄想についての研究会に何回か出たが、そうした研究会では、いつも"jumping to conclusion"という用語がキーワードになっており、ガレティらの研究の影響を感じた。

結論への性急な飛躍 (jumping to conclusion) という鍵概念は、直感的にもわかりやすいし、いろいろな現象に応用できる広さもある。ネーミングの仕方も成功して、研究者に影響力を持った。とはいえ、同業者としては、先を越されたという悔しさもないではない。監訳者が博士課程で研究していた頃、ちょうどこのような現象を見いだしたことがある。訳者解説2で述べたように、距離弁別課題において、非妄想型の統合失調症患者群は、あいまいな刺激に対して、あいまいさを許容せず、二者択一的に当てずっぽうの判断をする傾向があった。これをとりあえず「断定型判断バイアス」と命名した。この現象をどのように解釈すべきか20年くらい迷ってきたが、本書を読み、「結論への性急な飛躍バイアス」という概念を知って、やっと腑に落ちる思いがした。われわれもいいところまで行っていたのだという思いと、われわれもこの現象をねばり強く追いつけていけばモノになったかもしれないという悔しい思いが交錯する。ガレティとヘムズレイの研究が影響力を持ったのは、これまであちこちでバラバラに発見されていた現象を、ベイズ統計学という枠組みから解釈し、一般化して理解できるようにしたからであろう。研究者として大切なことは、興味深い現象を発見したとき、粘り強く追いつけて、研究を展開できるか否かという点である。監訳者にはそうした理論的能力や粘りがなかったと言えればそれまでだが、システムの問題として、欧米の研究室では、このような独創的な研究を育てていく姿勢が強い。日本でも、このような体制を整えて、「受信型」から「発信型」への発想の転換をしていかなければならないだろう。今からでも遅くはない。

訳者解説3でも述べたが、イギリスの異常心理学のエッセンスを伝えてくれる本書を翻

訳する意義は大きい。このような研究を日本にもぜひ定着させたいものである。

24. 認知行動アプローチと臨床心理学：イギリスに学んだこと

丹野義彦 金剛出版 2006

内容紹介

「留学中の半年間は、筆者の人生で最も充実した時期であった。イギリスでは科学にもとづいた臨床心理学という理念が、現場のすみずみまで行き渡っていた。臨床心理士は相当な臨床的实力を持っており、医師と対等に活躍をしていた。臨床心理士はほぼ国家資格であり、それを支える養成制度も整っていた。……これからの日本の臨床心理学を考えるにあたっては、イギリスがひとつのモデルになることを筆者は確信した」

この衝撃と喜びに導かれ、著者は現在の臨床心理学の主流である認知行動アプローチの最前線を直に見、学び取り、国際会議へも赴く。それらの体験をもとに、日本の臨床心理学のさらなる進化発展に寄与せんとする試みの集大成が本書である。

第1部は、世界の最先端を行くイギリス臨床心理学、とりわけ認知行動療法の理論と実践の詳細な解説、そして著者が精力的に足で稼いだ各大学の世界的研究者たちの生の姿が描き出されていく。また第2部では、イギリスの臨床心理学がなぜそこまで発展を遂げたか、膨大な文献を渉猟しながら、その歴史と学問的基盤、思想的展開を丁寧に説き明かす。さらに、日本の臨床心理学の未来にとって、何が不足し何が真に必要なかの道筋を指し示し、その高みへとわれわれを誘う、著者渾身の書なのである。本書によって、読者は認知行動アプローチの真髓と、日本の臨床心理学をエンパワーする新たな知の創出に出会うことだろう。

目次

第1部 臨床心理学

第1章 臨床心理学・心理療法・カウンセリング

第2章 臨床心理士の仕事

第3章 心理アセスメント

第4章 異常心理学

第5章 心理学的治療（認知行動療法）

第6章 治療効果の評価と「実証にもとづく臨床心理学」に

第7章 臨床心理学研究

第8章 他の医療職との連携

第9章 臨床心理士の養成と訓練

第10章 各大学の臨床心理学

第2部 臨床心理学と関連する領域

第11章 英国心理学会の活動

第12章 心理学の資格

第13章 職業的心理学（教育心理学，司法心理学，健康心理学など）

第14章 基礎的心理学

第15章 心理療法と精神分析

第16章 カウンセリング

第17章 精神医学と医療

あとがき

本書で述べたように、1980年代半ばからイギリスでおこった認知行動理論の領域拡大は、心理学の歴史に残るようなパラダイム・シフトである。心理学の歴史をひもといても、こうした時期はそう多くはない。不安障害に対する認知行動療法は、クラークをはじめとしてサルコフスキス、エーラーズ、ウェルズらのオリジナルな仕事である。また、統合失調症に対する認知行動療法は、ガレティ、ヘムズレイ、ワイクス、ピーターズ、バーチウッド、タリアらのオリジナルな仕事である。こうしたオリジナルな仕事が一時期に一定の場所でまとまって出現したことは歴史の不思議ともいえる。そうした心理学史の現場に立ち会うことができ、心理学者としてこれ以上の幸福はない。

クラーク、サルコフスキス、エーラーズたちの不安障害研究グループは、2000年にロンドン大学精神医学研究所に移り、統合失調症研究グループ（ヘムズレイ、ガレティ、ワイクス、ピーターズ）と合流した。これによって、ロンドン大学精神医学研究所の心理学科は、世界の認知行動療法をリードする研究センターとなった。筆者が留学したのは、この直後の2002年のことである。世界を代表する臨床家が集まった精神医学研究所において、その仕事ぶりを直に見ることができたのはまことに幸運であった。もう数年早かったら、クラークのグループやガレティは、まだオクスフォードにいたわけであり、ロンドンに来てはいなかったからである。

精神医学研究所は活気にあふれた場所であり、毎日いろいろな研究会がオープンに開かれており、毎週のようにイギリス各地やアメリカなどから一流の研究者が来て講演をしていた。研究者としてこれほど恵まれた環境にいられることは少ないだろう。精神医学研究所で学んだ臨床心理学を日本に還元することは、筆者のミッションのようにも感じられた。

筆者は、いたずらに「イギリスのものは何でも良い」とする外国崇拜の輩ではない。社会システムや社会の情報化など多くの側面では、日本はすでにイギリスを追い越している。（これについては、いつか機会があればまとめてみたいと思っている）。しかし、こと臨床心理学については、イギリスは世界のトップであって、日本はそこから数十年遅れていると実感したのである。

2003年1月に帰国してから、資料を整理したり、日本語の文献を調べるうちに、思わぬ長い時間がかかり、出版までに3年近くかかってしまった。この間に、日本の臨床心理学にも変化のきざしが見られるようになった。最大のターニング・ポイントは、2004年に神戸で開かれた世界行動療法認知療法会議（WCBC T）である。この国際学会では、世界29カ国から約1400名の参加者があった。これは、日本で開かれた心理学関係の国際学会において、1972年の国際心理学会議（参加者約2500名）と1990年の国際応用心理学会議（参加者約2500名）につぐ3番目に大規模な国際学会だという。日本でも、認知行動療法や実証にもとづく臨床心理学への関心が確実に高まっていることを示している。神戸の前と後では、状況は確実に変わった。また、この3年の間に、本書で紹介した臨床心理学者の多くを日本に呼んだり、その著書を翻訳したりすることができたのも幸いである。3年もの間、辛抱強く原稿を待っていただいた金剛出版の山内俊介さんに深く感謝したい。

奇しくも、夏目漱石がロンドンに留学したのは1900-1902年のことであり、筆者の留学からちょうど100年前のことであった。偶然ながら、筆者の留学は、漱石の留学と多くの共通点がある。①大学の教官が、②文部省からお金をもらって、③ロンドン大学に留学し、④家族と別れて単身で、⑤ロンドンで長期間の研究生生活を送ったという点である。漱石は、イギリスで文学の本質を究めたいという使命感を持っていた。この点も、臨床心理学に対する筆者の使命感と共通する。ロンドンでの漱石は、さんざんな生活を送るが、イギリス文学との悪戦苦闘の中から、文学の本質について考え、帰国後、独創的な『文学論』をまとめ、さらには『我が輩は猫である』に始まる近代的作品群を生みだしていったわけである。本書が漱石の『文学論』に匹敵するものになっているかどうかは読者の判断に任せるほかはないが、いずれにせよ、ロンドンでの体験を日本でどのように生かしているか、筆者のこれからが問われていると感じる。

23. 高校生の新現代社会ー共に生きる社会をめざしてー初訂版

谷内達・高橋進・宮崎隆次・浅子和美・江口勇治・丹野義彦 帝国書院 2005

内容紹介

高校の生徒が「社会の一員」として生きぬく力を養える教科書！

特色 1 社会の第一線で活躍する人々への直接取材による生の声や、社会の新しい動向を満載！

～実社会の事象に共感や課題意識をもち、自分と社会とのつながりを実感できます。

特色 2 過不足ない用語量をかみくだいて解説した本文！

しくみや概念が一目でわかるオリジナル図版！

～社会人として不可欠な常識・教養がしっかり身につきます。

特色 3 多くの生徒が将来直面する課題への対処方法を具体的に紹介！

～社会を生きぬくために必要な行動する力や知恵が身につきます。

特色 4 環境・福祉・人権などのテーマを、生徒の心に迫るかたちで全編にわたって強調！

～異なる立場の人々や自然環境のなかで、「共に生きる社会」をめざす姿勢が身につきます。

22. 16歳からの東大冒険講座 [3] 文学／脳と心／数理

東京大学教養学部（編） 培風館 2005

丹野義彦 大学で心理学を学ぶー心理学との出会い、心理学の面白さ。

内容紹介

ほんとうの勉強って何ですか？高校生の素朴な疑問にこたえ、学問の素晴らしさを伝えるべく始まった東大教養学部「高校生のための金曜特別講座」。

文系・理系の壁を超え、第一線で活躍する研究者の授業を収録。それぞれが追究するテーマについて、「研究の魅力」や「なぜこの分野を選択したか」など、ユニークな研究者たちの個人史を交えて語られる。大学で何を学ぶのか、何と、誰と出会えるのか。それは待っていても誰も教えてはくれない。はてしない知のユニバースでほんとうに学びたいものを探すための冒険旅行がはじまる。第3巻は、文学、脳と心、数理をキーワードに、シェイクスピア、心理カウンセリング、超弦理論や微積分、宮沢賢治など刺激的なテーマを紹介する。

目次

1部 文学（常識を破るーハムレットが太っていた！；21世紀に読み直す宮沢賢治；翻訳の不思議、文学のたくらみ；イタリア！イタリア！イタリア！）

2部 脳と心（大学で心理学を学ぶー心理学との出会い、心理学の面白さ；言語と脳からみた健康と病）

3部 数理（21世紀の物理学ー超弦理論とはどんなものか；知覚の複雑系理論；微積分の力）

21. 抑うつの臨床心理学

坂本真士・丹野義彦・大野裕（編）叢書・実証にもとづく臨床心理学 第2巻

東京大学出版会 2005

内容紹介

教室で、職場で、家庭で、医療現場で、抑うつに向き合う場面は多い。発症のメカニズム、認知行動療法をはじめとした治療・介入、地域、企業などの取り組みまで、日本第一線の研究者が「実証にもとづく臨床心理学」のコンセプトからせまる。

担当編集者から

抑うつは「こころの風邪」ともいわれ、多くのひとが経験するこころのトラブルですが、その辛さは本人の生活の質を奪い、社会生活にも支障をきたすものであり、総合的な取り組みが必要とされます。この本は、実証的研究と、実践的技法とが、相互に乗り入れ、人間が多くを面をもっているのに対応して多くの面から総合的に援助する方途をさぐります。

主要目次

はじめに（坂本真士・丹野義彦・大野裕）

1章 抑うつとは（坂本真士・大野裕）

2章 抑うつにおける臨床と基礎のインターフェイス（坂本真士）

第I部 抑うつの基礎研究

3章 抑うつと情報処理（大平英樹）

4章 抑うつと自己（坂本真士）

5章 抑うつと原因帰属（富家直明）

6章 抑うつと対人関係（杉山 崇）

7章 抑うつと母子・家族関係（菅原ますみ）

8章 抑うつとパーソナリティ（木島伸彦）

第II部 抑うつの予防と治療の実践研究

9章 うつ病に対する認知行動療法の実践（岩本隆茂・森伸幸）

10章 医師との連携における実践（伊藤絵美）

- 11 章 大学生における予防の実践・研究（西河正行・坂本真士）
- 12 章 地域における抑うつと自殺の予防実践と研究（田中江里子・根市恵子）
- 13 章 在職うつ病患者の職場復帰への支援（田島美幸・秋山剛）



20. 臨床心理学研究法

丹野義彦（編） 臨床心理学全書5 誠信書房 2004

内容紹介

臨床心理学研究の目的は、臨床心理士の知識を組織化することによって、クライアントへの援助に役立てることである。本書は、事例研究法、援助効果の評価研究、心の病理学研究、神経心理学研究や認知心理学研究と心理臨床の関わりなど、多様な心理学研究を分かりやすくまとめた。

目次

- 第1章 臨床心理学研究の理念と課題 （丹野義彦）
- 第2章 事例研究法 （藤原勝紀）
- 第3章 実践型研究法 （角田 豊・伊藤亜矢子）
- 第4章 援助効果の評価研究法 （野島一彦・市井雅哉）
- 第5章 心の病理学研究法 （小川俊樹）
- 第6章 神経心理学研究と心理臨床 （杉下守弘）
- 第7章 認知心理学研究法と心理臨床 （井村 修・勝俣暎史）

19. 認知行動療法の臨床ワークショップ2ーアーサー & クリスティン・ネズとガレティの面接技法

丹野義彦・坂野雄二・長谷川寿一・熊野宏昭・久保木富房（編） 金子書房 2004

内容紹介

認知行動療法の最前線・イギリスの3人の研究内容を紹介。療法のスキルを磨く上での最良のテキスト。

目次

- 1章 認知行動療法の学び方 丹野義彦
- 2章 ネズ夫妻はどのような臨床研究をしているか 大澤香織・金井嘉宏・坂野雄二
- 3章 問題解決療法 ーネズ夫妻のワークショップ
- 4章 ガレティはどのような臨床研究をしているか 山崎修道・丹野義彦
- 5章 統合失調症への認知行動療法 ーガレティのワークショップ
- 6章 欧米の臨床ワークショップ参加マニュアル 小堀修・丹野義彦

18. 認知行動療法の臨床ワークショップーサルコフスキスとバーチウツドの面接技法
丹野義彦（編） 金子書房 2002

内容紹介

認知行動療法の理論と実践で実績のある2人の研究内容を紹介。患者に有効な治療法を提供する大切さを説く。

目次

- 1章 認知療法と行動療法の動向 丹野義彦
- 2章 サルコフスキスはどのような臨床研究をしているか 杉浦義典
- 3章 不安障害の認知行動療法 ーサルコフスキスのワークショップ
- 4章 バーチウツドはどのような臨床研究をしているか 石垣琢磨
- 5章 精神分裂病の認知行動療法 ーバーチウツドのワークショップ
- 6章 精神分裂病治療における認知行動療法の役割 池淵恵美

17. 統合失調症の臨床心理学

横田正夫・丹野義彦・石垣琢磨（編著） 叢書・実証にもとづく臨床心理学 第1巻

東京大学出版会 2003

内容紹介

統合失調症（精神分裂病）には、医学的治療だけでなく、生活技能の再獲得や、認知・行動のたてなおしなど、心理学による介入・援助が必須である。よりトータルな援助をめざす統合失調症の臨床心理学を、介入法から研究の先端まで、日本でほぼはじめて本格的にまとめる。

担当編集者から

投薬による治療が発展した統合失調症。しかし、薬物で症状が改善しても、そのまま家庭に、社会に、すぐ復帰できるわけではありません。その人個人の時間と生活空間の広がりにあわせ、持続的で広がりのある、トータルなケアが、いまこそ望まれているのです。これこそ、心理学の出番。日本の研究の一線をまとめました（KG）。

主要目次

1 はじめに：本書のねらいと今後の展望（丹野義彦・横田正夫・石垣琢磨）

I 集団へのアプローチ

2 生活技能訓練からのアプローチ（皿田洋子）

3 心理劇からのアプローチ（茨木博子）

4 集団療法からのアプローチ（杉山恵理子）

5 認知行動療法からのアプローチ（石垣琢磨）

II 個人へのアプローチ

6 心理検査法からのアプローチ（空井健三）

7 描画からのアプローチ（横田正夫）

8 「心の理論」からのアプローチ（井村 修）

9 心理物理学からのアプローチ（丹野義彦）

10 記憶と神経心理学からのアプローチ（松井三枝）

あとがき（編者）



16. 性格の心理：ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ

丹野義彦 梅本堯夫・大山正 (監修) コンパクト新心理学ライブラリ第5巻 サイエンス社 2003

内容紹介

本書は、性格心理学をはじめて学ぶ大学生・短大生のためのテキストです。従来の理論をビッグファイブの枠組みにより再編成しました。また、生物学・異常心理学・臨床心理学的な観点を重視し、性格の発達・測定・適応・変容についても詳しく解説しました。

目次

第1部 性格の記述

- 第1章 性格の5つの次元 性格の記述—ビッグファイブの枠組み
- 第2章 第1の次元：内向性と外向性 ユングの向性理論の展開
- 第3章 第2の次元：愛着性と分離性 クレッチマーの気質理論の展開
- 第4章 第3の次元：統制性—自然性 「まじめさ」の裏表
- 第5章 第4の次元：情動性—非情動性 神経症になりやすい傾向
- 第6章 第5の次元：遊戯性—現実性 知的機能の構造と個人差

第2部 性格の発達

- 第7章 性格はどのように発達するか：個体発生
発達心理学からみたパーソナリティ
- 第8章 性格はどのように発達するか：系統発生
進化論と生物学からみたパーソナリティ

第3部 性格の測定

- 第9章 性格は測れるか 心理測定論からみたパーソナリティ

第4部 性格と適応

- 第10章 性格と適応 ストレス心理学からみたパーソナリティ
- 第11章 性格と不適応 異常心理学からみたパーソナリティ

第5部 性格の変容

- 第12章 性格は変えられるか (1) 精神分析理論からみたパーソナリティ
- 第13章 性格は変えられるか (2) 学習理論からみたパーソナリティ
- 第14章 性格は変えられるか (3) 認知理論からみたパーソナリティ
- 第15章 性格は変えられるか (4) 社会心理学からみたパーソナリティ
- 第16章 性格は変えられるか (5) 人間学的心理学からみたパーソナリティ

はしがき

本書は、性格心理学のテキストとして、いくつか新しい試みを取り入れてみた。

第1は、性格5因子論（ビッグファイブ）の枠組みを採用したことである。これまでの性格理論は、互いに無関係に研究されてきており、理論どうしの関係については考えられてこなかった。性格心理学のテキストも、いろいろな理論を並列的に並べているものが多かった。本書では、新しい試みとして、ビッグファイブの5次元ごとに、これまでの性格理論をまとめた。この枠組みの中で、ユング・クレッチマー・アイゼンク・キャッテルといったさまざまな性格理論や知能理論が整理できた。ビッグファイブの枠組みを用いれば、理論の寄せ集めではなく、対象に即した記述に近づくのではなかろうか。例えば、ユングの内向性の考え方と、臨床社会心理学の自己意識理論は、ともにビッグファイブの第1次元の話であり、かなり似ている。内向性の研究は、ユングの時代から現代に至るまで、研究が蓄積して今なお発展していると言える。「ユングやクレッチマーの類型論はもう古い」などとは言えないのである。また、性格次元という対象に即して、理論どうしを比べることも可能になる。例えば、ベックのいう対人志向性格と自律性格の区別であるが、前者はビッグファイブの第3次元の話であり、後者は第4次元の話である。このように、理論の比較や関係づけをすることによって、新しい研究のアイデアが出てこないだろうか。ビッグファイブ理論は、性格を考える発想のツールとしてたいへん便利である。しかも、ビッグファイブは実証研究にもとづいており、思弁的ではなく実証可能な形で提出できるのは大きな利点である。

第2の試みは、生物学的な視点を強調したことである。ビッグファイブは実在の次元ではなく、単なる性格認知の次元ではないかという批判は多い。これに答えるためには、各次元の生物学的な基礎があるのかを調べていく必要がある。こうした観点から、性格心理学のテキストとしてはやや異例であるが、できるだけ生物学的な研究を紹介するように努めた。第8章では、系統発生の視点から、進化論と生物学からみた性格をとりあげた。

第3の試みは、性格の異常心理学と臨床心理学を重視した点である。性格心理学と異常心理学は、これまで密接な関連をもって発展してきた。本書の第4部「性格と適応」では、異常心理学からみた性格をとりあげた。その際、不適応の分類や診断基準としては、アメリカ精神医学会のDSM（診断と統計のマニュアル）に準拠した。DSMには利点と欠点がいちいちあり、これを用いることには賛否両論がある。本書では、それらを比較して利点が欠点を上回ると判断し、DSMを用いることにした。欧米の異常心理学のテキストはほとんどがDSMにもとづいた構成になっている。

また、臨床心理学では、性格がどのように変わっていくかが大きな問題となる。性格の変化しない部分よりも、変化する部分に関心が向く。そこで、第5部「性格の変容」では、臨床心理学からみた性格をとりあげた。

異常心理学や臨床心理学を重視した理由のひとつは、臨床の基礎研究を促したかったからである。欧米では、性格心理学（パーソナリティ心理学）が、臨床研究の基礎となっている。神経症傾向とか、人格障害、素因ストレスモデル、対処行動（コーピング）、原因帰属、自己注目といった性格心理学の用語が、臨床の現場で当たり前のように入っている。こうした理論にもとづいた臨床研究もさかんである。日本はまだそうした状況には

ないが、これから性格心理学と臨床心理学の協力が必要であろう。両者のインターフェースを活性化させたい。このような願いをこめて本書を執筆した。

15. 心理臨床の認知心理学：感情障害の認知モデル

A. ウェルズ G.マッシュューズ（著） 箱田裕司・津田彰・丹野義彦（監訳） 培風館 2002

アマゾンコムでの紹介はこちら

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/456305660X/qid=1051357951/sr=1-7/ref=sr_1_2_7/249-7776560-1235551

内容紹介

抑うつや不安などの感情障害を、認知心理学における情報処理の観点からとらえ直し、認知行動的アプローチによる治療の可能性を述べています。とくに、自己意識について、認知心理学の視点からとらえなおし、SREFモデル（自己調節実行機能モデル）という新理論を提示しています。これによって、神経症になりやすい傾向を新しい視点からとらえなおし、不安障害の心理療法の基礎を考えています。

14. 臨床社会心理学の進歩 実りあるインターフェイスをめざして

R. コワルスキ M.リアリー (著) 安藤清志・丹野義彦 (監訳) 北大路書房 2001

内容紹介

これまで臨床心理学、カウンセリング心理学が扱うとされてきた諸問題に関して、社会心理学がどのようにその理解を助けることができるのか、最新の知見に基づいて検討。学部学生、大学院生向けのテキストとしてだけでなく、この領域で行なわれている重要かつ興味深い研究を、研究者や実践家が概観できるように工夫した。

目次

社会心理学と臨床心理学のインターフェイス:歴史と現状

社会-認知プロセス (帰属過程:社会心理学と臨床心理学の統合)

日常生活の中の自己中心性と対人的問題

低自尊心者の社会的比較)

社会生活における自己 (自己制御と精神病理)

恥・罪悪感・嫉妬・妬み:問題をはらむ社会的感情/自尊心のソシオメーター理論)

対人的プロセス (言い出しがたいことを口にする:自己開示と精神的健康不適応的な印象維持)

個人的関係 (ソーシャル・サポートと心理的障害:社会心理学からの洞察)

うまく機能していない関係)

集団はメンタルヘルスにどんな影響を与えるか:グループ・ダイナミックスと心理的幸福)

社会-臨床心理学の過去・現在・未来)

訳者あとがき

編者が「まえがき」で述べているように、欧米では社会心理学と臨床心理学のインターフェイスにあたる領域で、1980年前後から多くの書籍が出版され、専門誌も刊行されている。中でも、1986年に本書の編者リアリー教授と本書第9章を担当しているミラー教授が著した“Social psychology and dysfunctional behavior”は、この領域に含まれるトピックスの紹介だけでなく、その歴史や展望についても手際よくまとめられており、まさにテ

キストとして使うには格好の書であった（日本では『不適応と臨床の社会心理学』〔誠信書房, 1989〕という書名で翻訳出版されている）。以後、これも「まえがき」に述べられている通り、この領域の研究は活発に行われてきたのだが、最新の研究をカバーしながら、レベルや分量の面で大学院生や専門の学部学生が使用するのに適したテキストは少なかった。事情は日本でも同じで、社会心理学と臨床心理学のインターフェイスに関わる問題、たとえば抑うつ、帰属、自己、対人関係、ソーシャルサポート、社会的比較などに関しては、欧米に比べれば数は少ないものの、関心をもつ研究者は少なくない。また、個々のトピックを扱った良書はたくさん出版されているのだが、この領域全般を見渡すような構成になっているものはほとんどなかった。そこで、本書を訳出してこの領域での研究を刺激しよう、というのが今回の翻訳の趣旨である。本書は、社会・臨床心理学の全分野に目配りしつつ、各章においては最新の研究をもカバーしており、まさに力作揃いである。「二代目のテキスト」の役割を十分に果たしてくれることだろう。

『不適応と臨床の社会心理学』の翻訳は3名の共同作業だったが、今回は2名の監訳者のもと、本書が扱っている領域を得意とする研究者の方々11名に、それぞれ1章ずつ分担していただくことにした。主として社会心理学の領域を中心に活動している人たちであるが、こうした協同作業自体がインターフェイスの研究を活発化させる一助になると考えたからである。さらに、こうしたインターフェイスの領域では、個々の研究者が自分の関心にしたがって研究を進めることはもちろん大切だが、それと同時に、社会心理学と臨床心理学者、カウンセリングを実践している人々が、実際に顔を合わせる(inter-faceの)機会をもつことも重要だと思う。また、本書は社会心理学と臨床心理学のインターフェイスの問題を扱っているが、社会心理学自体、他の多くの専門領域と接している。より大きな枠組みで考えれば、対人的な要因を強調すると同時に、認知心理学、発達心理学など実証的な研究で得られた知見や理論を臨床実践の中にどのように活かしていくのか、という問題につらなることになるだろう。その意味で、監訳者らはこれまでも何回か、日本社会心理学会や日本心理学会の大会において、社会心理学と臨床心理学のインターフェイス、あるいはより広く、実証的研究と臨床実践の関係を考えるワークショップ、シンポジウム等を主催してきたが、これからもこうした学会での活動を展開する必要があるし、また共同研究を企画するのも意義あることと思われる。こうした共同作業を通じて、インターフェイス領域の研究が盛んに行われていることをアピールし、同時に、今後の方向性や問題点を浮き彫りにすることができるはずである。今回の翻訳を、そうした活動の一里塚として位置づけたいと思っている。

本書には、臨床心理学やカウンセリング心理学の側からみても、臨床場面で問題となる現象を扱った研究や理論が豊富に紹介されている。こうした研究の成果は、臨床実践に直接役立てることができるものである。実際、こうした研究成果について理解を深めておくことで、クライアントに対する接し方もずいぶんと違ってくるだろう。ただし、こうした知識が実際のカウンセリングや治療にどのように活かされるのかという点については、必ずしも楽観できる状況にはない。とくに大学院教育に関しては、本書でも述べられているように、欧米の大学でも成功しているとはいえないようである。日本においてはまだ端緒についたばかりだが、臨床心理士の指定校制度が実施されることになり、臨床心理士認定協会が指定するカリキュラムにしたがって単位を取得することになりつつある。今後、臨床心理士を養成する場において、社会・臨床心理学のような科目が積極的に取り入れられることが必要であろう。

また、本書にあげられた研究をモデルとして、臨床場面での現象を実証研究の土台にのせることも容易になるだろう。わが国の臨床心理学研究は事例研究が主である。たしかに臨床実践は「事例に始まり事例に終わる」のであるが、ただ1事例の研究にとどまる限りは、そこで得られた知見が一般性を持つのがわからない。事例を越えた一般性を持ちうる理論を作ることがこれからの課題といえるだろう。そのような状況において、本書は臨床研究のいろいろなモデルを提供してくれるはずである。

8～13 講座臨床心理学（全6巻）

下山晴彦・丹野義彦（編） 東京大学出版会 2001～2002

13. 第1巻 臨床心理学とは何か
12. 第2巻 臨床心理学研究
11. 第3巻 異常心理学Ⅰ
10. 第4巻 異常心理学Ⅱ
9. 第5巻 発達臨床心理学
8. 第6巻 社会臨床心理学

東京大学出版会のホームページでの紹介はこちら

<http://www.utp.or.jp/shelf/series/sinri.html>

刊行のことば より

スクールカウンセリングの制度が導入されるなど、臨床心理学の社会的需要は日増しに高まっています。ところが、日本の臨床心理学は、個々の心理療法の学派の集合体にとどまっており、学問としての独自の存在意義を提示できていません。

しかし、目を世界に転じると、英米の臨床心理学は、1990年代に入って臨床心理学をひとつの統合体として見る立場が明確となり、さらにポストモダンの学問として更なる発展の段階に向かっています。日本においても、臨床心理士の社会的な責任が強まっている今こそ、臨床心理学の新たな枠組みや体制を整えていく必要があるのではないのでしょうか。こうした危機感から本講座は生まれました。

キーワードは「実証性」と「実践性」、そして両者の統合です。まず方法論として、心理学としての実証性、つまりデータに基づく推論という方法論を重視しました。ここではナラティブなどの質的データも含まれます。次に実践性として、単に外国で作られた既成の理論を援用するだけでなく、日本の臨床現場での実践活動に基づくことを重視しました。臨床現場での実践から理論モデルを形成していくことができれば、実証性と実践性の統合が可能となります。本講座では、このような姿勢を重視しました。

もちろん、こうした大きな目標が一朝一夕にできあがるはずもなく、本講座が完成するまでの道のりは険しいものがあり、構想から完成まで4年を費やしました。各執筆者には、担当分野の文献レビューを行ったうえで、執筆者自身の実践や研究を紹介し、臨床心理学のあるべき姿を論じていただくようお願いしました。こうした困難な作業によって、単なる学派の集合体を脱して、臨床心理学を統合された全体としてとらえるという目標の一端は達成できたと思っています。新しい世紀の臨床心理学を創っていくために、多くの臨床心理士・関連する臨床家・大学院生・学部学生・研究者に読んでいただきたいと願っています。

7. エビデンス臨床心理学－認知行動理論の最前線

丹野義彦 日本評論社 2001

アマゾンコムでの紹介文はこちら

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/tg/detail/-/books/453556177X/customer-reviews/ref=cm_cr_dp_1_1/249-7776560-1235551

目次

- 第1章 認知臨床心理学のフロンティア
- 第1部 抑うつ理論
 - 第2章 ベックの認知療法と認知病理学
 - 第3章 抑うつスキーマ論争とティーズデイルの抑うつ理論
 - 第4章 認知アプローチの展開 –アナログ研究とメタ分析–
 - 第5章 ベック理論への批判と抑うつ研究の最前線
- 第2部 不安障害の理論
 - 第6章 パニック障害と空間恐怖の認知モデル
 - 第7章 強迫性障害の認知モデル
 - 第8章 対人恐怖の認知モデル
- 第3部 精神分裂病の理論
 - 第9章 妄想の認知モデル
 - 第10章 幻覚の認知モデル
- 第4部 まとめと今後の課題
 - 第11章 エビデンス臨床心理学の構築に向けて

「あとがき」より

著者がつねづね不思議に思っていることは、わが国には異常心理学（精神病理学）という領域がないことである。欧米ではこの領域はきわめてさかんであり、心理学者によって書かれた異常心理学の研究書や教科書は多い。新しい領域を育てていくためには、教科書や研究書が必要である。著者はこれまで、ドライデンとレントゥル編の『認知臨床心理学入門』を監訳し、坂本真士氏と共著で『自分のところからよむ臨床心理学入門』を書いてきた。前者は、大学院向けの異常心理学のテキストであり、後者は、大学前期課程向けの異常心理学の入門書である（いずれも東京大学出版会）。この両者をつなぐ大学後期課程向けのテキストが本書である。これで異常心理学の3部作がそろったことになる。もし、本書を読んでむずかしすぎると感じた方は『自分のところからよむ臨床心理学入門』を手にとっていただきたい。また、本書を読んで物足りないと感じた方はぜひ『認知臨床心理学入門』へと進んでいただきたい。また、本書と前後して、『講座臨床心理学全6巻』が刊行される予定であり、その第3巻・4巻が「異常心理学」を扱っている。そちらも参照いただきたい。

本書は、季刊『精神科診断学』に第9巻3号（1998年）から第12巻1号（2001年）まで連載した論文をまとめたものである。連載は足かけ4年に及び、2つの世紀にまたがってしまったが、連載中は著者の学問的な思い入れを思う存分書き込むことができ、こんな楽しい体験はなかった。連載の機会を与えていただいた『精神科診断学』編集委員の先生方、とりわけ東京大学教育学研究科の下山晴彦先生に感謝したい。また、連載を担当いただいた日本評論社の編集部の人克行さんと、みごとな書物に仕上げていただいた編集部の遠藤俊夫さんに感謝したい。

この連載のもとになったのは、東京大学教養学部の後期課程（生命認知科学科）での異常心理学の講義である。この講義では、抑うつ・不安障害・精神分裂病に分けて、ビデオにより事例を提示したあと、アセスメント・メカニズム・治療の側面から考えている。そうした授業を通してふだん考えているアイデアを本書ではのびのびと書くことができた。また、本書で触れた著者の研究は、駒場キャンパスの心理学研究室、とりわけ丹野研究室の大学院生たちとの共同研究の賜である。この場を借りて、いつも著者の研究や教育の仕事を支えていただいている駒場の心理・教育学部会の先生方や、丹野研の大学院生およびそのOB・OGに感謝したい。

本書にまとめる間にはいろいろなことがあった。2000年には、第1章で述べたように、イギリスの異常心理学・臨床心理学を視察することができた。それまでは、著者が思い描く心理学の姿は、現在の日本の臨床心理学においては異端であり、著者ひとりの独断にすぎないのではないかという不安があった。しかし、イギリスの臨床心理学をみて、まさに著者が求めていた心理学の姿がそこにあると感じた。しかもそれこそが世界の主流なのである。こうした思いは、2001年にバンクーバーでの世界行動認知療法学会（WCBC T）やグラスゴウでの英国行動認知心理療法学会（B A B C P）に参加してますます強まった。これらの大会では、本書に登場した臨床家・研究者が第一線で活躍していた。例えば、ベックはもうかなりの高齢であるが、「精神分裂病の認知療法」といった領域にチャレンジしていた。ほかにも、ラックマン、クラーク、サルコフスキス、ウェルズ、ガレティ、バーチウッド、タリアといった心理学者が国際学会の表舞台に立って活躍していた。臨床心理学はクライアントから学ぶという姿勢が大切であることはもちろんだが、それと同時に世界レベルの学問的な達成から学ぶという姿勢も大切であろう。

こうした交流がもとになって、2001年には、サルコフスキス教授とバーチウッド教授を日本心理臨床学会に招待することができた。おふたりは世界的に著名であり、その業績は国際学会でも頻繁に引用される。おふたりの仕事の一部については、本書の第7章と第10章にも触れられている。また、2001年には文部科学省の科研費「実証にもとづく臨床心理学をわが国に定着させるシステムづくり」の補助を得ることができた。実証にもとづく臨床心理学がわが国に定着するには長い年月がかかるだろう。しかし、科学的な臨床心理学が未成熟だった日本においては、これから本当の科学的な臨床心理学を作っていかなければならないのである。さらに、2004年には世界行動認知療法学会（WCBC T）が神戸で開かれる予定である。これまでの臨床心理学は、外国の心理療法を輸入す

る受信型であったが、これからは日本の理論を海外にアピールしていく発信型にならないといけない。その契機として、国際学会の主催は大きな意味をもっている。今後、日本でも神戸大会のような国際学会が積極的に開かれるようにしたいものである。

6. 自分のところからよむ臨床心理学入門

丹野義彦・坂本真士 東京大学出版会 2001

アマゾンコムでの紹介はこちら

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4130120344/qid=1051357951/sr=1-5/ref=sr_1_2_5/249-7776560-1235551

目次

- 0 はじめに 「自分のところからよむ」ということ
- 1 抑うつ 「こころのカゼ」とつきあう
コラム スチューデント・アパシー
- 2 対人不安 なぜ人とつきあうのが怖いのだろうか
コラム 摂食障害－拒食症と過食症
- 3 妄想と自我障害 精神分裂病の世界
コラム ストーカーと妄想
- 4 臨床の知の技法
巻末解説

坂本真士氏の紹介（心理学ワールドより，2001年）

これまで「こころの問題」や「臨床心理学」というと、「自分とは無関係」「怪しい」「うさんくさい」などと感じる人もいたのではないのでしょうか。しかし、抑うつや対人不安や妄想などは、誰にでもある心理現象を基にしているのです。本書では、信頼できる心理テストを用いて、自分のところからそれらの現象を見て、そのメカニズムを考えていきます。「こころの問題」は特殊なことではないことがわかっていただけたと思います。本書では社会心理学の視点から説明している部分もあり、主要な概念や理論の説明は付録に書かれています。心理学初学者はもちろん、臨床心理学や社会心理学に興味のある方にお読みいただければと思います。

5. はじめて出会う心理学

長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦・広中直行 有斐閣 2000

内容紹介

好評のやさしい「心理学」入門書の改訂版。全体の輪郭をスケッチしてから基礎を学ぶように構成された大変わかりやすい手頃で斬新なテキスト。動機づけ、学習、脳研究、発達障害等、一部内容を加筆・刷新。口絵で錯視図を収録。読んで、見て、楽しく学べる。 ..

目次

第1部 心と適応

- 第1章 心理学とは
- 第2章 心の進化
- 第3章 心の発達
- 第4章 ライフサイクル
- 第5章 動機づけと情動
- 第6章 性 格
- 第7章 知 能
- 第8章 ストレスとメンタルヘルス
- 第9章 カウンセリングと心理療法

第2部 心のしくみ

- 第10章 感 覚
- 第11章 知 覚
- 第12章 記 憶
- 第13章 学 習
- 第14章 思 考
- 第15章 脳と心
- 第16章 脳損傷と心の動き
- 第17章 社会のなかの人
- 第18章 心と社会

4. 認知行動アプローチ—臨床心理学のニューウェーブ
丹野義彦（編） 現代のエスプリ 392 至文堂 2000

目次

1. 紙上討論会 『基礎心理学と臨床心理学のリエゾンを求めて』

臨床実践における理論モデルの位置づけ / 下山晴彦

心理学における基礎と臨床 / 辻 平治郎

抑うつ研究の立場から / 坂本真士

臨床心理学の新しい研究法を求めて / 丹野義彦

認知心理学の立場から / 小谷津孝明

2. 抑うつ・アパシー

スチューデント・アパシーの3次元構造モデル / 下山晴彦

無気力の心理学 / 桜井茂男

抑鬱リアリズムによって見えてきたこと / 工藤恵理子

抑うつと社会心理学 / 坂本真士

3. 不安

不安障害の臨床 / 陳峻秀, 坂野雄二

対人不安の心理学 / 生和秀和

ストレスの状態と特性 / 津田 彰, G. マチユース, 矢島潤平

強迫性障害への認知行動アプローチ / 杉浦義典

4. 精神分裂病

分裂病と家族のEE（感情表出） / 三野善央

精神分裂病とモニタリング障害 / 井村 修

描画を通して見た精神分裂病患者の認知障害 / 横田正夫

幻覚への認知臨床心理学的アプローチ / 石垣琢磨

5. 人格障害

解離性同一性障害（多重人格障害）の認知心理学的考察 / 若林明雄

「解離」の理解と心理臨床 / 田辺 肇

クロニンジャーの理論と人格障害 / 木島伸彦

境界性人格障害の認知行動療法 / 井沢功一朗

6. 摂食障害

摂食障害の臨床における認知行動アプローチ / 前田基成

7. 小児自閉症

自閉症と心の理論 / 大六一志

3. 認知臨床心理学入門 認知行動アプローチの実践的理解のために

W. ドライデン R. レントゥル(編) 丹野義彦(監訳) 東京大学出版会 1996

アマゾンコムでの書評はこちら

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4130111043/qid=1051357851/sr=1-4/ref=sr_1_2_4/249-7776560-1235551

内容 (目次)

1章 認知行動アプローチの基礎理論	丹野義彦訳
2章 不安障害	大六一志訳
3章 抑うつ	坂本真士訳
4章 精神分裂病	丸田伯子訳
5章 摂食障害と肥満	広中直行訳
6章 アルコール依存・薬物依存	伊藤忠弘訳
7章 高齢者臨床	溝渕 淳訳

この本の意義

この分野で初の体系的紹介であり、読者のこの分野に対する需要は大きい。

①内容が新しくホットである。わが国最初の体系的紹介となる。

「行動療法」は日本でもよく知られているが、「認知療法」や「認知行動療法」は、80年代に入って新しく展開した分野であり、欧米ではポピュラーになっているのに日本ではまだあまり知られていない。日本では、各論的に紹介する論文や本は多いが、まだ体系的な紹介がない。講義やゼミでも、この分野の中級者向けのテキストがあればよいのと思うことがある。それにぴったりなのがこの本。この本を読むと、何か新しいことを勉強したという気になる。

②代表的な症状を、問題別に配列し、臨床場面には使いやすい。

異常心理学における代表的な症状をバランスよく網羅している。オーソドックスな精神分裂病・うつ病といった精神病から、不安・攻撃性といった神経症的な症状を取り上げ、その一方で、摂食障害・アルコール依存・老人問題・性的問題など、古典的な枠組みを越えた、現代的な問題も扱っている。

また、臨床場面で多くぶつかる問題について、症状別に配列し、問題中心のアプローチをとっているので、臨床場面には使いやすい。

③記述が平易でわかりやすい。

特定の理論や特定の治療法に固執するような本ではない。ロンドン学派が特徴とするように、いろいろな理論や治療について、データをあげながら客観的に公平に記述しており、信頼できる。

④臨床心理学・精神医学などの大学（院）のテキストとして使いやすい。

異常心理学・精神医学のトピックスをバランスよく網羅している。基礎理論と心理治療のバランスが抜群である。各章が「基礎理論の部」と「心理治療の部」に分かれているので、基礎心理学（認知心理学・行動心理学・社会心理学など）の学生も、臨床心理学の学生も、両方ともに読める。広い分野の学生に薦められ、基礎心理学と臨床心理学の橋渡しができる。執筆者を見ても、大学研究者と臨床家が半々の割合である。わが国では、基礎と臨床が遊離しすぎているのでこのようなバランスのよい本がなかなか出てこない。

内容のレベルは中級。学部・大学院・臨床家のレベル。初心者向きの本ではないが、かといって、狭い専門分野に限定したものでもない。認知行動療法の解説書を読んで、「もっと突っ込んで読んでみたい」と思う人のために最適である。適度に専門的であり、適度に教科書的なレビューになっている。だから、臨床心理学や精神医学の臨床家にも十分役に立つ。

2. 知の技法—東京大学教養学部「基礎演習」テキスト

小林康夫・船曳建夫（編） 東京大学出版会 1994

丹野義彦 アンケート—基礎演習を自己検証する

内容紹介

カリキュラム改革が進む東大教養学部で、93年度から文系1年生の必修科目として開設されたゼミ形式の「基礎演習」のテキスト。最先端の学問の魅力を紹介し、論文の書き方・口頭発表の仕方・資料の集め方等を収めた「究極の参考書」。

目次

第I部 学問の行為論—誰のための真理か（小林康夫）

第II部 認識の技術—アクチュアリティと多様なアプローチ

[現場のダイナミクス]

フィールドワーク—ここから世界を読み始める（中村雄祐）

史料—日本的反逆と正当化の論理（義江彰夫）

アンケート—基礎演習を自己検証する（丹野義彦）

[言語の論理]

翻訳—作品の声を聞く（柴田元幸）

解釈—漱石テキストの多様な読解可能性（小森陽一）

検索—コンコードダンスが聞く言葉の冒険旅行（高田康成）

構造—ドラゴン・クエストから言語の本質へ（山中桂一）

[イメージと情報]

レトリック—Madonnaの発見、そしてその彼方（松浦寿輝）

統計—数字を通して「不況」を読む（松原望）

モデル—ジャンケンを通して見る意思決定の戦略（高橋伸夫）

コンピューティング—選挙のアルゴリズム（山口和紀）

[複数の視点]

比較—日本人は猿に見えるか（大澤吉博）

アクチュアリティ—「難民」報道の落とし穴（古田元夫）

関係—「地域」を超えて「世界」へ（山影進）

第 III 部 表現の技術—他者理解から自己表現へ

0. 表現するに足る議論とは何か (船曳建夫)
1. 論文を書くとはどのようなことか (門脇俊介)
2. 論文の作法 (門脇俊介)
3. 口頭発表の作法と技法 (長谷川寿一)
4. テクノロジーの利用 (長谷川寿一)
5. 調査の方法

1. 自己形成の心理学－青年期のアイデンティティとその障害－

高田利武・丹野義彦・渡辺弘憲 川島書店 1987

内容紹介

本書は、“自己の形成とその障害”という視点を中心に、青年の心理と行動を統一的に考察することをめざして、社会心理学、異常心理学、臨床心理学的立場からアプローチしたものです。青年期のさまざまな現象や問題、青年期の発達一般の問題、自己にまつわる人間性の問題などが、28にもおよぶトピックスを織込みながら、平易に興味深く述べられています。

